



人権イメージキャラクター
人KENまる君

ぞろぞろ

令和6年度
全国
中学生

人権作文

コンテスト

東京都大会 入賞作品集



人権イメージ
キャラクター
人KENあゆみちゃん

ぞろぞろ

令和6年度 全国中学生人権作文コンテスト 東京都大会 入賞作品集

人権相談はこちらへ

相談は、人権擁護委員又は法務局職員がお受けします。



人権についての全般的な相談はこちら
みんなの人権110番

(全国共通)

ゼロゼロみんなのひやくとおぼん

0570-003-110

差別や虐待、パワーハラスメントなど、様々な人権問題についての相談電話です。
電話は、おかけになった場所の最寄りの法務局・地方方法局につながります。

常設相談所

- 東京法務局人権擁護部
- 東京法務局府中支局
- 同 八王子支局
- 同 西多摩支局



子どもに関する相談はこちら
こどもの人権110番

(全国共通・通話料無料)

ゼロゼロみんなのひやくとおぼん

0120-007-110

学校でのいじめ、虐待など、子どもの人権問題に関する専用相談電話です。



女性に関する相談はこちら
女性の人権ホットライン

(全国共通)

ゼロコロナゼロのハートライン

0570-070-810

パートナーからの暴力、職場でのセクハラなど、女性の人権問題に関する専用相談電話です。

【相談時間】月曜日～金曜日(休日を除く)の午前8時30分～午後5時15分



LINEじんけん相談 LINEでも相談を受け付けているよ



@snsjinkensoudan

検索



こちらから友だち追加してください▶



インターネット人権相談 子どもの人権 **SOS-eメール**

インターネット人権相談

検索

<https://www.jinken.go.jp/>



外国語による人権相談

東京法務局人権擁護部

0570-090911

英語・中国語・韓国語・フィリピン語・ポルトガル語・ベトナム語
ネパール語・スペイン語・インドネシア語・タイ語

【相談時間】

平日午前9時～午後5時

はしがき

東京法務局と東京都人権擁護委員連合会は、次代を担う多くの中学生に人権問題に関する作文を書くことを通じ、互いの人権を尊重することの大切さについて理解を深め、豊かな人権感覚を身に付けてもらうことを目的として、昭和四七年度から、都内の中学生を対象とした人権作文コンテストを実施してまいりました。また、昭和五六年度からは、法務省及び全国人権擁護委員連合会が主催する「全国中学生人権作文コンテスト」が実施されることとなり、毎年、数多くの作品が寄せられています。

本年度においても、東京新聞と共催し、東京都教育委員会、一般財団法人東京私立中学高等学校協会、公益財団法人人権擁護協力会の後援をいただき、東京都大会を実施しましたところ、都内三〇四校の中学校と外国人学校から、三万四、六九六編に上る作品が寄せられました。

本作品集では、入賞作品三十六編を紹介させていただきました。いずれも中学生らしい純粋な感覚で人権課題をとらえた作品です。より多くの方々にお読みいただき、人権尊重思想の普及高揚が図られることを願っております。

終わりに、本年度の東京都大会実施に当たり、熱意をもって応募された中学生の皆さんを始め、多大な御理解と協力を賜りました各中学校、外国人学校、東京都教育委員会、一般財団法人東京私立中学高等学校協会、公益財団法人人権擁護協力会、東京都教育庁、各区市町村教育委員会、各区市町村人権擁護事務担当者の皆様方、共催いただいた東京新聞に、厚く御礼申し上げます。

令和六年一二月

東京法務局
東京都人権擁護委員連合会

目次

〔入賞作品〕

最優秀賞（東京法務局長賞）

子どもの権利……………荒川区立第三中学校 三年 宇田華都……………4

最優秀賞（東京都人権擁護委員連合会会長賞）

「書けない」を抱えて生きる……………国立市立国立第一中学校 二年 中山有哉……………6

最優秀賞（東京新聞賞）

偏見にとらわれない事を大切に……………中野区立第二中学校 二年（非公表）……………8

特別優秀賞（東京都教育委員会賞）

知らないことは罪……………東村山市立東村山第四中学校 二年 小澤明莉……………10

優秀賞

いじめ—人権は永遠につなげるもの—……………（非公表）……………（非公表）……………12

レオタードは、誰が決めるの？……………北区立王子桜中学校 一年 小瀬なつみ……………14

支える人を支えられる社会に……………品川区立浜川中学校 七年 永島茉桜……………16

共に生きる社会へ……………渋谷区立原宿外苑中学校 三年 目黒龍一郎……………18

「普通」の子……………八丈町立大賀郷中学校 三年 浅沼由珠……………20

「平等なもの」……………町田市立鶴川第二中学校 三年 小野颯士……………22

発達障害の友達から教わったこと……………西東京市立ひばりが丘中学校 二年 岡田滲来……………24

広島が教えてくれたこと……………羽村市立羽村第三中学校 三年 橋本薫……………26

障害者の可能性……………あきる野市立西中学校 一年 葛野多緒……………28

奨励賞

兄との生活を通じて……………	新宿区立新宿西戸山中学校	二年	清水 菜津子……………	30
温かい心の交流……………	練馬区立大泉第二中学校	二年	佐久間 美希……………	32
経験と願い、そして誓い いじめ……………	江東区立深川第八中学校	三年	小林 蒼欧……………	34
人生を変えた戦争……………	江戸川区立松江第五中学校	一年	(非公表)……………	36
私を感じた同調圧力……………	新島村立新島中学校	一年	東野 結美子……………	38
人と言葉……………	立川市立立川第三中学校	一年	(非公表)……………	40
今を変えられる勇氣……………	立川市立立川第九中学校	一年	池 亀 沙 羅……………	42
『無意識』を『意識する』……………	八王子市立松が谷中学校	三年	(非公表)……………	44
目に見える障害と見えない障害……………	八王子市立第一中学校	一年	相 吉 こころ……………	46
「たった一言」で変わる人生……………	八王子市立四谷中学校	一年	城 川 悠 成……………	48
自分らしくあるために……………	町田市立鶴川中学校	二年	(非公表)……………	50
知ろうとする気持ち……………	稲城市立稲城第三中学校	一年	(非公表)……………	52
情報と繋がりで学びの機会を守る……………	多摩市立和田中学校	二年	佐 宗 泰 知……………	54
私の生涯……………	府中市立府中第一中学校	二年	中 西 松 介……………	56
笑顔のバトン……………	府中市立府中第二中学校	三年	(非公表)……………	58
後悔からの一歩……………	国分寺市立第二中学校	三年	芳 根 春 歌……………	60
威風堂々と……………	調布市立第七中学校	二年	武 田 花……………	62
いじめと傍観……………	小平市立小平第三中学校	一年	椎 川 煌 大……………	64
障がいがある人の人権について……………	東村山市立東村山第五中学校	二年	渡 邊 世 唯……………	66
祖父母が教えてくれたこと……………	西東京市立田無第一中学校	一年	西 谷 結 人……………	68
相手と自分の理解……………	西東京市立田無第二中学校	二年	若 杉 紗 英……………	70
私のお父さん……………	西東京市立ひばりが丘中学校	二年	(非公表)……………	72
	あさる野市立増戸中学校	二年	渡 邊 桜 子……………	74

最優秀賞

(東京法務局長賞)

子どもの権利

荒川区立第三中学校 三年

宇田華都

小学六年生の二月、私に小児がんが見つかりました。そのまま中学一年生の夏休みまで約半年間、東京都世田谷区にある国立成育医療研究センターに入院していました。

私はほとんど自覚症状がないまま入院したので、状況に気持ちを追いつかず、治療に前向きになれませんでした。家族と離れ、そのうえコロナ禍で面会時間は制限されました。小学校の卒業式と中学校の入学式に、みんなと一緒に出られませんでした。あまりの辛さに心を閉ざしてしまった私に、主治医の先生が紹介してくれたのが、子どもリエゾン室の先生でした。

子どもリエゾン室というのは、私が入院していた国立成育医療研究センターの中にある科で、病気でつらい気持ちになった子どもに、寄り添ってくれる先生がいるところです。先生は、治療を受ける子どもにもいろいろな

権利があるのだと教えてくれました。具体的には自分の病気のことを知る権利、自分で治療に参加する権利、入院していても勉強を続ける権利、子どもとして当たり前なこと(遊ぶことなど)をする権利などです。そしてセルフアドボガシーという言葉も聞きました。

セルフアドボガシーとは、日本語で言う自己権利擁護という意味になります。障害があっても意見が尊重され、最善の利益が考慮されるための支援や、自身の意見が代弁される権利です。

入院中、主治医の先生や看護師さん、薬剤師さんは、病気や治療のことについては、とても細かく説明してくれました。しかし、私は辛くて自分の意見を言う気持ちになれませんでした。そんな私の代わりに子どもリエゾン室の先生が、私の思っていることを代弁してくれるようになり、味方がいると思えてうれしかったことを覚えていきます。

その後は、自分で主治医の先生や看護師さん、薬剤師さんに、治療中の辛いことも言えるようになりました。食事が食べられなくなった時も、自分で栄養士さんを呼んで相談することができるようになりました。

勉強のこともとても不安でしたが、国立成育医療研究センターには、入院中の子どもが勉強できる院内学級があり、そこで勉強を続けることができました。授業の後

には保育士さんとゲームをして遊ぶのが、一日の終わりの楽しみでした。ファシリテイドッグのマサくんといふあうのも楽しみでした。

入院したことは辛かったけれど、病院の人達は、子どもが子どもらしくいられるように、いろいろなことを助けてくれました。

そして、私自身も、思っていることは自分の口で説明し、自分の力で周囲の人達に理解してもらうことが大切なのだと思えることができました。

入院中は、こどもリエゾン室の先生を始め、病院の人達がサポートしてくれたおかげで、なんとか過ごすことができました。しかし、地元の中学校に復学してからは、自分の気持ちを上手く伝える勇気がなくなっていました。というのも、私にとっては初めての地元の中学校での生活で、先生は全員初対面。生徒も半分は他の小学校から来た知らない人達。一学期の間に、すっかり仲良くなったみんなの輪に、退院したばかりの私が入っていくことが、とても怖かったです。

そんな時に、私の気持ちを聞いてくれたのが、支援員の先生でした。支援員の先生と話すうちに、少しずつ自分の意見が言えるようになっていきました。

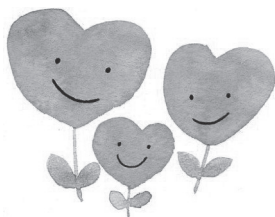
現在私は、この時の経験を生かして、今治療に立ち向かっている仲間達の力になりたいと思ひ、患者会などで

活動しています。

小児がんになつて辛かったこと、してほしかったサポート、助けてくれてうれしかったこと。そして小児がんサバイバーとして復学した時の気持ち。それらを、私の言葉でいろいろな人に伝えていくことで、私のセルフアドボガシーにつながり、なおかつ仲間達のサポートにつながる事ができたらうれしいと思っています。

私の個人的な夢ですが、小さい頃から小学校の先生になりたいと思っています。夢をあきらめずにいられるのも、私の権利の一つだと思っています。

全ての子どもたちの権利が守られることを願っています。



最優秀賞

（東京都人権擁護委員連合会会長賞）

「書けない」を抱えて生きる

国立市立国立第一中学校 二年

中山 有哉

僕は「字を書く」ことがとても難しいです。思うように手指が動かないのです。ずっとこのことで悩んで苦しんできました。小学五年生の時、担任の先生から「ノートをパソコンで書いてみたら」と提案されました。でも、皆と違うことをして目立つのが怖くて諦めました。検査を受けて書字障害だとわかった後も考えは変わりませんでした。

ある参観日、比喻表現を使って図工作品の紹介をするという授業で、原稿をノートに書きました。僕の発表の番、丁寧に書いたはずのそれは「自分でも」全く読めず、思ったような発表ができませんでした。悔しくて悲しくて、大勢の前で恥をかいた僕の心はズタズタに切り刻まれました。僕は字をうまく書けないから、もう一生勉強ができる人にはなれないんだ。どうしよう。その時、あの提案を思い出しました。鉛筆は無理でもタイプ

ングでなら書ける。そこにかけるしかない。人にどう思われてもいい。僕はパソコンを導入する決心をしました。しかし、パソコンでのノートの取り方も、プリントへの書き入れ方もわかりません。誰も教えてくれません。

母がある記事を見つけました。そこには、僕と同じ障害を持ちながら、タブレットを使ってノートを取り、テストを受け、普通に学校へ通い、今は有名一流大学で最先端の研究に励んでいるという、先駆者の道りが記されていました。その人の抱える困難は、まるで僕と同じでした。記事を読んで心が震えました。僕だけじゃないんだ、苦しみもがき、それでも道を切り開いている人がいるんだと知りました。そして、僕の未来に立ちほはだかるであろう問題も載っていました。ICT機器で受験させてもらうことの難しさです。その人はこの障害を広く世間に知ってもらう活動もしていました。僕は、この人が中心となって開催される講義に参加してみました。先駆者の先輩方と、道を探し苦しんでいる仲間がたくさんいました。その講義で、僕は自分の障害を特性として捉えることや、工夫が必要なだけだと知り、自分自身を取り戻すことができました。また先輩方からICTを活用して学習するスキルを学びました。

遂に小学校でiPadを導入する日がきました。初め

てiPadを使って受けた授業は今でも忘れられませんが。思ったことをどんどん文章にすることができ、板書もすらすらできる、先生が言ったことをメモする余裕まである、書けるってなんてすごいんだ！ 今まで苦しまれてきた目の前の高くて大きな壁が取り払われて、世界が広がるのを感じました。授業がすごく楽しい！なんて素晴らしい世界なんだ！と。

中学校に入学してすぐ、「字を書くのが難しい障害があること、そのため学校でiPadを使わせてほしいこと」をプレゼンしました。「変な目でみられませんか」と祈りながら、理解してほしいと伝えました。ありがたいことに先生もクラスメイトも温かく受け入れてくれました。お陰で僕は中学生になってからも授業や定期テストでiPadを使わせてもらえています。学習する権利を失わずに生きることができています。しかし、あの講義で出会った仲間全員が僕と同じような環境で学校生活を送れているわけではありません。周りから理解されず差別を受けて転校した仲間や、入学時に先生から「iPadを初めは使ってもいいけど、練習していつか鉛筆で書けるように頑張りましょう」と言われて絶望し、不登校になった仲間もいます。眼鏡をかけている人に「初めはかけていてもいいけど、練習して視力を上げて、いつか眼鏡を外せるように頑張りましょう」と言い

ますか？ 僕達は、ただ皆と一緒に勉強をしたいただけなのです。工夫を頼んでも許されない、理解してもらえない、とても悲しい現実です。僕達なりの学び方で学ぶ、これは基本的な人権に定められている教育を受ける権利だと思います。前例がない、教員が足りない等、様々な理由があると思います。僕が通っている中学校では、書字障害の生徒は僕が初めてだったそうです。それでも先生方は、何に困っているのか親身に話を聞いてくれます。前例がない分、一生懸命わかっていてくれます。僕のような生徒を排除しない学校作りをしてくれていることに心から感謝しています。

全国には今も苦しんでいる仲間達がいます。障害が理解されず学習する機会を失い、道を見失い、生きることすら嫌になってしまっている仲間達がいます。僕もこの先ずっと今のような環境に身を置けるのかとても心配です。望む進学先へ行けるのか、学力だけじゃない壁があることもわかっています。努力では治せない、苦しさが見えにくい障害があることを知ってもらいたい。そして誰もが人権を侵されない社会になってほしいです。先駆者の先輩方のように仲間達の光になる為に、勉強に励み、できることを一つ一つ行動して生きていきます。

最優秀賞

(東京新聞賞)

偏見にとらわれない事を大切に

中野区立第二中学校 二年

(非公表)

私は幼い頃から他人とコミュニケーションをとるのが苦手で、落ち着きもなかった。だから、小学校低学年の時は特別支援学級に在籍していた。特別支援学級のみならずは優しくて、気づけばたくさん友達がいた。休み時間には紙飛行機を飛ばしたり、絵を描いたりして、私は穏やかな学校生活を送っていた。勉強も毎日頑張つて、先生からもよくほめられていた。

だが、その楽しい思い出は二年で終わった。だが、その楽しい思い出は二年で終わった。「三年生になったら、新しい所で勉強するんだよ。」

二年生の冬のある日、そう母が私に言った。その新しい所というのは普通学級のことだ。低学年での成長ぶりを見て、普通学級に転籍しても大丈夫ではないかと両親が考えたからだ。特別支援学級の友達と別れてしまうことに悲しみを感ずる反面、普通学級というものにワクワクしている私があった。どんな子たちがいるんだろう、

どんなことをするんだろう、楽しそうだと。

しかし、その思いは普通学級に転籍してからすぐに変わってしまった。支援学級とは違い、授業はついていけなくなるが多くなった。支援学級にはなかった宿題という期限がある勉強に嫌気がさした。そのうえろは厳しくなっていて、破ってしまうこともあった。そして何よりも、普通学級の新しいクラスメイトとコミュニケーションをとったり、集団行動をしたりするのがとても苦手だった。もともと消極的な性格だということもあり、友達もできずまともに人としやべれなかった。そんな私にある女子はうんざりしたように、「もう嫌だ。」

「もう嫌だ。」
「早い、ある男子は私の行動にイライラし、」

「早くやれよ。」
「早くやれよ。」
と言った。優しく接してくれた子もいたが、普通学級での生活にとまどい、うまく行動できない私に冷たい態度をとる子も少なくはなかった。そして、新しい環境に少しは慣れてきた頃、教室で授業の準備しているグループの子たちの会話が聞こえてきた。

「あいつ特別支援学級だったんでしょ。何でこのクラスにいるの。うざいんだけど。」

それを聞いて私の体はとても震えていた。陰口を言われているとは思わなかったのだ。その陰口が頭に残り、も

う学校に行きたくないとまで思ったが、私は支援学級に通っていたのだから、相手がそう思うのもしようがないのだと自分を責めていた。

五年生になったある日、転機が訪れた。普通学級で友達が出来たのだ。最初は休み時間に話しかけてくれる程度だったが、そのうち一緒に絵を描いたり、学校から帰ったり、休日に遊んだりするまでになった。だから隠したかった。過去に私が特別支援学級に在籍していたことを。その友達はそのことを全く知らないようだった。もしバレたら、友達は私に対して冷たい態度を取るかもしれない、私と縁を切るかもしれない、それだけがずっと不安だった。

一年間ほど隠し続けた頃だろうか。学校の休み時間に突然その友達に、
「特別支援学級にいたんだってね。」

と言われた。私の心に衝撃が走った。「どうしよう。なぜバレたの?」という言葉が頭の中を巡った。人生終わったかもしれないというところまで考えてしまった。何と返答していいかわからず黙り込んでいた私に対して、友達は言った。

「でも、うちはそんなの全然気にしないし。」

とても意外だった。けれども、その言葉でわかった。友達は私を「特別支援学級にいた子」ではなく、「絵を描

くのが好きな仲の良い子」つまり内面を見てくれているのだと。私のこれまでの不安だった気持ちが一気に楽になった。

私は中学二年生になった今でもその友達と仲良くしている。落ち着きも以前よりは出てきて、同級生ともたくさん話すようになった。勉強や部活も自分なりに頑張つて、毎日が充実している。小学校で普通学級に転籍してきた頃、私自身に悪いところがあつてクラスメイトから嫌われることもあつたが、ただ「特別支援学級にいた子だから」という理由だけで嫌われたことも確かにあつたと思う。中学校で周りから自分はどう思われているかわからないけれど、私自身は「特別支援学級にいたから」という引け目を今は感じていない。

「特別支援学級だったから」とか関係なく、その人がどんな人間なのか内面を見ることの大切さを、私は初めての普通学級の友達から教わった。「障害者だから」「外国人だから」など、世界には様々な「○○だから」という偏見や差別がある。私は自分の経験を通して、「○○だから」というものにとらわれず、人と接していきたいと思つている。

特別優秀賞

（東京都教育委員会賞）

知らないことは罪

東村山市立東村山第四中学校 二年

小澤 明莉

人権について、今まであまり深く考えたことがなかった。私は、テーマにハンセン病を選んだ。なぜなら私の住んでいる東村山には東京で唯一の国立ハンセン病療養所「多磨全生園」があるからだ。今までハンセン病は、映画「もののけ姫」にでてくる人たちだと耳にしたことはあった。世間の偏見を受けていた程度の知識しかなく、しっかり学ぼうとしたことがなかった。そこで私は、国立ハンセン病資料館に行った。資料館は、ハンセン病をめぐる歴史や療養所での生活、隔離されてなお人間のな生き方を求めて葛藤する人の姿が展示してあった。

記憶に残る言葉があった。

「同情！ これほどたまらないものが他にあるだろうか。同情されるとは何か。それは同情されねばならんほど自分が無価値で無意義な存在を証明するものだ。これが俺

にはたまらんのだ。」

ハンセン病と診断され、二十三歳の若さで亡くなった北條民雄の日記だ。資料館に来て、可哀想だと思ったり、辛かったのだろうと思ったり、私は同情の気持ちを感じていたため、北條民雄の言葉にガツンと言われてしまったように感じた。確かに同情からは何も生まれえない。同情の気持ちを感じた自分は、相手より上から目線になってはいないか、勝手に可哀想だと思い込んでいたが、ハンセン病患者が強く生きる姿みて、勇気ももらうことができたのだ。同情よりも、ハンセン病を自分の問題として想像し共感することが大切なのではないかと思った。

当時、ハンセン病の原因がわからなかったとはいえ、ハンセン病に罹ったせいで隔離され、病気を治すために入ってきた療養所では過酷な労働をし、反抗的な態度をとると懲罰用の建物に入れられた。また結婚はできても子供を産むことは許されないのだ。普通なら喜べることもハンセン病だというだけで、幸せを奪われてしまうのかと言葉にならなかった。療養所というより刑務所の方が近いのではないかと感じた。ハンセン病患者は、肉体的な苦しみがあるのに希望の見えないような生活に何を支えに生きて行けば良いのか、まさに生き地獄だと胸が苦しくなった。

今ハンセン病は全然怖くない病気だ。薬を飲めば完治する。正しい知識のもとに予防できる病気だ。ハンセン病は、よく理解できない病への不安が差別へと姿を変えてしまったのだ。感染力は弱いのに怖い病気だと誤ったイメージが社会に定着してしまった。これは同一に語ってよいのかわからないが、コロナとつながっていると感じた。

コロナの流行が始まった時、感染した人はネット上でバッシング、都道府県ナンバーに対する嫌がらせ、医療従事者たちにも心ない声が投げつけられた。今でも見えない恐怖に対する世の中の差別はなくなっていないと悲しくもなったが、それと同時に正しい情報を知ることが大切だと感じた。偏見の目は人々に根付いてしまうと無くすることは難しく、差別や偏見が、国全体になってしまうとこんな恐ろしいことになってしまうということを知った。

今回の人権作文が課題にでなかったら、私はハンセン病のことを詳しく知らないままだった。偏見の目は実際に経験をしなければ、なかなか取り除くことはできないし、どれだけ想っても体験した人の辛さには遠く及ばないが、知ること勉強することが大切だと感じた。無知であることが意識していないところで偏見や差別を生むこともあるのだ。知るといことが大切であると学ぶこと

ができた。

私はもう一度「もののけ姫」を鑑賞してみた。長と呼べられた包帯の男性の言葉がとてつもなく重たく強く心に残った。

「生きることはまことに苦しくつらい……。世を呪い、人を呪い、それでも生きたい……。」

ハンセン病の歴史を学び、宮崎駿監督がどのような想いでこのセリフを作り上げたのかを考えながら鑑賞すると、今までと違った見方になった。差別的な扱いを受けつつも必死で生きようとした姿に、辛いことがあっても、生きようという気持ちは大切だと思った。

ハンセン病問題は、入所者の高齢化により忘れられつつある。その差別の歴史を、昔はこんな問題があったんだねと風化させるのではなく、他人事ではなく、自分たちの問題としてハンセン病について知ることの大切さを感じた。是非、国立ハンセン病資料館に一度足を運んで欲しい。

優秀賞

いじめ―人権は永遠につなげるもの―

(非公表)

(非公表)

私は、いじめ防止対策推進法第二十八条のいじめ重大事態の被害者です。いじめは「人権」と深い関わりがある問題です。

「人権」という言葉は、私にとっては、空気のように当たり前な存在で、これまで当然の権利だと思っていました。例えば、学校でも「いじめは重大な人権侵害」と何度も聞きましたし、道徳だけでなく、様々な授業で、人権に関わる内容を勉強しました。

「いじめられている人がいたらどうしますか。」という先生の問いかけに、「注意します。」「いじめはだめだと思いません。」「いじめられている子と友達になります。」と、立派な答えがたくさん出ていたと記憶しています。

だから私は、自分がいじめられても、自分が何もしなくても、誰かが気づいて助けてくれると思っていました。

しかし現実は違いました。

ある日、私は「自殺しろ」「学校に来るな」などひどいことを言われました。平気なふりをしましたが、その晩から。私は頭痛や吐き気、腹痛で、毎日吐くようになりました。夜も何度も目が覚めてしまい、フラフラになりながら、学校に通いました。

しかし、「学校では元氣そうですよ」と先生たちからは言われるし、クラスで孤立していったのは私の方でした。

そんなことがしばらく続き、私の心はとうとう折れて「もう無理だ、学校へは通えない」という思いになりました。私は、私の体と心を自分でどうすることも出来なくなりました。

私は、ようやく気が付きました。私の人権は尊重されていないことに。

そんな時、ニュースで、私がされたように、ひどいこと言われた児童が、「いじめ重大事態」に認定されたと知りました。

いじめ重大事態に認定されれば、今の辛い状況が少しは改善するかもしれない。私は、いじめ防止対策推進法、文部科学省のいじめ重大事態ガイドラインを一生懸命に読みました。自治体が公表している、いじめ重大事態の報告書もいくつか読みました。

そして、病院で書いていただいた「心身症」の診断書を添えて、学校に対して「いじめ重大事態の疑いがある」と申立てを行いました。

結果的に、私へのいじめは、会議で「いじめ重大事態」として認定されました。

私は、学校が好きです。そんなに数は多くはないけれど、大切な友達がいいます。いじめが辛いから、転校したり、もつと悲しい結末になっている話を聞くと本当に悲しくなります。

人権は、自ら声を上げ、自ら守ろうとしなければ、簡単に侵害されるものと経験しました。憲法第九十七条にあるように「人権は、試練に堪え、努力した成果」なのだと思いました。

私は、自分から行動を起こすことに無縁で、ぼうつとしていました。自分から悪いことさえしなければ、平和に暮らせると思っていました。人権は守られるものだと思っていました。

でも、考えが変わりました。私も、私のため、将来いじめられるかもしれない誰かのために「努力」しなければと心の底から思ったのです。

でも、何をしたらいいのか分かりませんでした。

そんな時、私が行動を起こす機会がやってきました。文部科学省の「いじめ重大事態のガイドライン」の改訂

のパブリックコメントが募集されていました。ガイドラインは、とても長く、難しい言葉で書かれていましたが、一生懸命に読みました。そして、自分がいじめ重大事態の申立てを行った経験をもとに、意見を書いて、その理由も書いて送りました。初めてのことでだったので、私が言いたいことを理解してもらえるのか、そもそも中学生が書いた意見を読んで採用されるのかわかりませんでした。

そして八月の終わり、そのパブリックコメントについての会議がありました。私にとっては「結果発表」の気分でした。ドキドキしながら赤字の入った文章を読んでいききました。

本当に、何て言ったらよいか。いじめで経験したことは辛かったりしたけれど、自分の考えを読んで、こんな大事なガイドラインに反映してくれる人がいるのだ、よかった、と心から思いました。感謝の気持ちでいっぱいです。

残念なことに、一度無くした健康は、すぐには治らないようです。でも、気長に治療を続けながら、私は、これからも、自分のため、人のため、人権について考え続け、考えるだけでなく、発信し行動し、人権が守られていくよう、この権利を永遠につなげていくよう「努力したい」と思っています。

優秀賞

レオタードは、誰が決めるの？

北区立王子桜中学校 一年

小瀬 なつみ

「こんなレオタードを着るの？」と初めて見たレオタードに驚きました。

私は小学四年生の夏休みに、遊びでトランポリンを始めました。楽しくて一日中飛んでいると、大会に出てみないかと先生に誘われました。まさか、遊びで始めたのに「大会」に出るなんて考えもしませんでした。そこで知り合った仲間と一緒に初参加することにしました。そのためにはレオタードというスポーツウェアを買うことになり、私は戸惑っていました。なぜなら、肌の露出部分が多く、水着のようだったからです。日が経つにつれて無意識にレオタードへの抵抗感が増していったように感じました。軽い気持ちで大会に出ようと思ったのですが、レオタードを着るには大きな勇気が必要でした。特に抵抗があったのは、大会で大勢の人がいる中で、太ももの上まで深く切れ込みがあるハイレグのレオタード

を着て、激しい動きの演技をしなければいけないことです。

私がレオタードについて疑問を持ったことは二つあります。一つめは、なぜ男子は短パンを重ね着できるのに、女子はレオタード一枚だけなのか、男女差が必要なのかという点です。女子でも短パンを履いてもいいのではないかと考えました。二つめは、レオタードの肌の露出についてです。たしかに、演技をしつかり審査するため、体の隅々の動作まで見る必要があります。しかし、肌の露出がなくても競技の審査は成り立つのではないかと思いました。なぜなら、審査で体のシルエツトがしっかり見えれば、肌の露出は関係ないと考えたからです。

他の競技者がどんな問題を抱えているのか調査してみると、私を感じていたような同じ悩みを持った選手たちが行動を起こしていたことがわかりました。読売オンラインのサンドラ・ヘフェリン氏のコラム（二〇二一年七月）によると「東京オリンピックピックでドイツの女子体操チームが、従来の脚が見えるレオタードではなく、脚を覆うパンツスタイルのユニタードを着て試合に挑みました。彼女たちは選択肢があることが重要だと主張しています。また、ビーチハンドボールでは、女子だけにあるビキニ着用規定と戦って短パンを試合で着用したところ罰金が科せられました。しかし、欧州では、選手たちの

勇気と女性の自由な選択について好意的な報道がされま
したと述べられています。

長い間、一生懸命練習してきて、規定に違反しても自
ら人間としてのプライドをかけて行動せざるを得なかつ
た状況を思うと心が揺さぶられました。女性の服装に対
して選択肢があることが、いかに重要かを再認識しまし
た。

また、ナンバークラブで体操の杉原愛子さんのインタ
ビュー記事（二〇二三年十二月）によると、短パンくら
いの長さまでの露出を抑えた「スパッツ型レオタード」
を杉原さん自ら考案し、販売に至った思いが語られてい
ます。盗撮などの被害に長年苦しんだ経験から、選手の
選択肢を広げ、安心して競技に集中できる衣装を作りた
いと苦心の末、完成したそうです。

一生懸命考えて作ったのに、従来のレオタードしか認
められないとか、体操の人氣が下がるかもしれないと心
配されたかもしれません。どんな形なら競技関係者や選
手たちが納得できるのか試行錯誤を重ねて彼女の思いが
実った形なのだと思像すると感慨深いです。そして体操
競技だけでなく、同じ問題に悩んでいた多様なスポーツ
選手たちが、このレオタードを着用している選手を実際
に見れば、とても心強くなると思います。

レオタードの形を考える際に重要なのは、審査しやす

く、動きやすく、盗撮などの心配がない安全な服装であ
ることです。例えば、保護者や肌を出さないで生活して
いる文化の人々も安心して観覧できることも大事です。
そして選手たちの個々の気持ち尊重しつつ、各競技で
スポーツウェアを選択できれば、スポーツに対する壁が
少し小さくなると思います。小さな子供たちが様々なス
ポーツに出会ったときに、「やってみようかな」と言え
ば、保護者の方も気軽に「そうだね、やってみたら」と
ウェアに関しては最初から安心して対応できると思いま
す。また、男女関係なく小さいときから、「なんか変だ
な」と感じることを、「声に出して周囲に伝えていいん
だ」と自然に感じられる雰囲気や身近な場所から築いて
いけるように、自分でも意識して生活していきたいと思
います。

私が考える人権は、みんなが平等に意見を言えて、安
心して暮らせることです。ここでは、競技に集中できる
スポーツのレオタードについての疑問を掘り下げてみま
した。このように日常にある小さな疑問を考え続けるこ
とが、社会自体においても、多様な意見や価値観を尊重
し合うことにつながっていくと信じています。

優秀賞

支える人を支えられる社会に

品川区立浜川中学校 七年

永島 茉桜

小学六年生の夏休み、私はパーキンソン病の大叔母の家に遊びに行きました。大叔母は三十代後半にパーキンソン病を発病し、三十年近く闘病生活をしています。

大叔母の家に行くと大叔母が大歓迎で迎えてくれ、「よく来たね、会えてうれしい。」と何度も何度も言いました。大叔父は段ボール満杯のお菓子、たくさんジュースやスイーツを机いっぱいに出してくれ、まるでコンビニのようでした。

大叔母がジュースを飲むとしますがストローをさすことができません。スイーツのふたも取ることができません。大叔父はその都度、大叔母をサポートします。手が震えてプリンをうまく口に運べないので、大叔父が食べさせてあげます。座ること、立ち上がること、歩くことなど日常の動作全て一人でできないので、大叔父がサポートしています。

大叔母が昼寝をしているとき、祖母が「お義兄さん、本当にありがとうございます。感謝しかありません。」

と言うと、大叔父の目から涙があふれ出しました。私は大人の男性が泣くのを見たことが無かったのとてむびつくりしました。大叔父はしばらく声を出さずに泣き続けた後、大叔母との暮らしについて話始めました。

ここ数年で病状が悪化し、一人でできないことが増えていること。外出を嫌がるため、デイケアを利用してくれないこと。知らない人に会うのも嫌がるため、介護の人に家に来てもらうこともできないこと。軽度の痴呆があり、日によっては大叔父がだれかわからなくなり泣きわめくこと。大叔母を家に残して買い物に出かけたところ、帰ってきたら倒れており、骨折してしまつたこと。毎日毎日同じことを繰り返す介護のむなしさ、先の見えない不安を誰にも共有できないことが何よりも辛いように、大叔父の口からは一人で抱えてきた思いが滝のようにあふれ出しました。

大叔母の病状が悪化するまで、大叔父は駄菓子屋を経営していました。子供と、子供をわくわくさせるお菓子が大好きなのです。大叔母を一人残して長時間家を空けることができない今は、家の隣のコンビニでのお菓子が唯一の楽しみで、自分達では食べきれないほどのお菓子

を買ってしまおうそうです。買うことが唯一の楽しみで、買っている時は気持ちが悪くなるそうです。私は大叔父が出してくれたお菓子に込められた思いをかみしめながら「おいしいおいしい」と笑顔で食べました。大叔父の気持ちが明るくなることを祈りながら。

日本は障害者へのサポートは手厚い国だと思っています。実際、大叔母のような病気に苦しむ人をサポートする制度はたくさんあります。しかし、デイケアなどの介護サービスが制度として用意されていたとしても、被介護者がその制度を拒否したら利用が難しくなり、その負担は介護者に重くのしかかります。現状を誰とも共有、共感できない介護者の苦しみ、孤独さは身を切るような痛みだと思っています。

大叔父は元来社交的な性格なので、パーキンソン病の介護者が集まるサークルに参加していたのですが、高齢男性はサークルになじむことが難しいことに加え、大叔母が外出を拒むため参加することがままならず、介護の苦しみを吐き出す場所がなくなってしまうそうです。

大叔父と大叔母には娘が一人おり、以前、結婚を考えた方がいましたが、両家の顔合わせの時に、大叔母がパーキンソン病だと知った相手の親の猛反対により結婚が破談になったそうです。『生まれた子供にパーキンソン病が遺伝するかもしれない。パーキンソン病が遺伝す

る確率は低いということは知っているけど、ゼロではない。生まれてくる子供にパーキンソン病が遺伝したとき、あなたを許せるかわからない。』と言われたそうです。

現在の社会は多様性について多くの議論がなされ、どんな障害も個性として認識する考えが浸透しつつあるように思えます。障害や不自由な生活を公開することで、周囲の認知を促進している動画投稿もよく見ます。一方で障害者を支える人達の生活についてはまだ十分に認知されていないように思われます。障害者の人数以上に障害者を支える人がいるのに、その人たちの不自由さ、苦しみ、助けを求める声はまだまだ小さいように思えます。求める声を大きくすることは一朝一夕にはできません。けれど、求める声が存在することを知り、耳を傾け、社会問題だと認識することはすぐにできます。私自身の声もとても小さいかもしれないけど、自分が体験したこと、感じたことを発しているように思います。みんなが幸福を実感でき、気持ちが悪くなる、そんな社会の実現を願って。

優秀賞

共に生きる社会へ

渋谷区立原宿外苑中学校 三年

目黒 龍一郎

「むうっ！」

男性の呻くような声が、耳の奥底にこびりついてしばらく離れなかった。周囲の人たちの冷やかな視線も、あの日の鉛色の空も、今でも僕の脳裏に鮮明に焼き付いている。

それは、とてもショックな出来事だった。歩き慣れた雨上がりの道を、僕は少しばかり急いで歩いてきた。湿度で息苦しくなるほどの人混みをすり抜けるように進む。その時、「カーン、カーン」と耳馴染みの無い音が聞こえた。その音が自分に近づいて来ているということを確認した瞬間、目の前に白杖をついた男性が出現した。そして、気がついた時にはもう、彼と衝突していたのだった。

「むうっ！」

白杖の男性は、何とも言えない腹の底から湧き出てき

たような低い声を発したが、幸い、よろけることもなく前進して行つた。僕が謝ろうと振り返つた時には、既に彼は人混みの中に姿を消していた。僕は申し訳ない気持ちと不甲斐なく恥ずかしい思いで胸が苦しくなつた。衝突に気づいた人々からの凍てつくほどの視線が向けられているような感覚になり、往來の中でしばらく佇むことしか出来なかつた。格好悪いことは承知で言い訳を述べた。でも、それもいつもの日常の一部だった。いつも通りの休日、いつもの景色。そんな日常の中で起きた、非日常と思える出来事だった。

何故、それほどまでに大きなショックを受けたのかと言うと、折しも僕は「共生」をテーマとした企画を実行委員長として立ち上げたばかりだったからである。僕は、「共生」や「バリアフリー」などの言葉を多用しながらも、あの白杖を持った男性と「同じ世界を共に生きている」ことを認識出来ていなかったのだ。口では聞こえの良い言葉を並べていても、障がいのある人を自分とは直接関わりのない、特別な存在であると捉えていたのだらう。だからこそ、白杖の男性に対してすぐさま反応できなかつたのだ。そのような理想と現実の乖離に気付いた僕は、自分自身に失望し、罪悪感に苛まれた。あの

時の男性の声、見えた景色、触れた感覚。その全てを反芻するようにして罪悪感を拭い去るかのごとく、ひたすら考えた。共生とは何か。共に生きるのは、誰と誰なのか。障がい者と健常者という言葉があるが、そもそもその区別すること自体がどうなのか。その区別する壁を撤廃することで、共生社会は実現できるのだろうか。

幾日もかけて自問自答を重ねていくうち、頭の中に重くどんよりと立ち込めていた濃霧が少しずつ晴れていく。明るい陽射しをようやく感じられるようになった頃、「共生」をテーマとした企画の目的が、はつきりとした形となつて見えてきた。そうだ、僕達はもともと一人ひとり違うじゃないか。全てが完璧な人もいないし、自分と百パーセント同じ相手もないのだ。皆個性があつて、いびつな形。でも、それでも良いし、それが良いのだ、と。

そこで、僕は企画のロゴマークを、試験の結果などを可視化する際に利用するリーダーチャートを用いてデザインした。敢えてバランスの偏つたリーダーチャートを作成すると尖つたいびつなパーツになる。それを五つ重ね合わせてデザインしたロゴマークは、まるで星のような形になった。ロゴマークが完成した時、「一人ひとりはいびつでも、手を取り合つて共に生きることで星のように輝くんだよ。」とロゴマークが僕に教えてくれたよ

うな気がした。

テーマと目的が僕の中で明確に定まつてからは、この企画運営に全身全霊で取り組んだ。有難いことに、パラスポーツの協会など二十を超える団体の協力を得ることができ、非常に大きな催しとなった。中学校全体を会場として利用し、在校生や保護者、地域の方々ははじめとする誰もが自由に参加できるイベントだ。パラスポーツなどの体験を通して、参加者が共生社会について考えるためのきっかけづくりになればと、実行委員メンバー一丸となつて準備や運営にあたつた。当日の参加者数は約一千人。大人も子どもも、障がいの有無に関わらず、共にパラスポーツなどの様々な体験を楽しんだ。そこには何の境界線も壁も存在せず、中学校の至るところでとびきりの笑顔が溢れる一日となった。

これらの経験を通して、僕は改めて考える。共生社会に必要なことは、区別するための壁ではなく、一人ひとりが自立したうえで個性を尊重し合うことなのではないだろうか。そのような社会の実現のために、僕は自分のできることを日頃から考え、一つ一つ実行していきたい。そしてその想いを共有できる人たちと手を取り合いたい、いつか星のように光り輝きたいと心から願っている。

優
秀
賞

「普通」の子

八丈町立大賀郷中学校 三年

浅沼由珠

「普通の子たちに合わせてくれて大丈夫だから。」

委員会の話し合いのとき、別のクラスの子に言われた言葉。それまでは雰囲気も明るかったのに、私は少し、背筋が冷たくなった。

私の通う中学校は、島で唯一の、特別支援学級がある中学校だ。各学年十五人程度の人数が少ない学校で、生徒は学年関係なく全体的に仲が良い。特別支援学級にいる生徒とは授業での交流も多いことから、みんながクラスを気にせず過ごしている。

私と同じ学年の子も特別支援学級に通っている。中学校になってから一緒になった子だけれど、総合などの授業は一緒に受けるから色々な話をして少しずつ仲が良くなっていった。

今年も、委員会がその子と同じだった。役職も同じだったため、今までより話す機会が多くなった。その委

員会で、全校生徒での交流会を企画した。三年生が企画自体の運営を進めるため、話し合いをその子と始めた。全校生徒ができる、特別支援学級の子にも無理がないもの。それを二人で考える。全員が平等に楽しめるものを企画するのは難しく、行き詰まってしまった。その時に、

「普通の子たちに合わせてくれて大丈夫だから。」

そう言われて、気を遣わせてしまったことに気付いた。無意識のうちに、私が傷つけてしまったかもしれない。そう思ったのに、謝ることもできなかった。そして、「普通なんて言わないでよ」。そんな言葉は私には出てこなかった。申し訳ないという気持ちと、自分が何も言えなかったことへの後悔でいっぱいになった。

言わせてしまったかもしれない言葉が、私が「普通」について改めて考えるきっかけとなった。すぐに言葉を返せなかったのは、私自身が「普通」とは何なのかをよく考え、自分の意見を持つことができていなかったからだと気付いた。どこかで聞いた、「無意識のうちに自分の中にできている常識」というのが何なのか、今までよりちゃんと理解できた気がした。

考えているうちに、以前訪れた科学館で開催されていたロボット展での映像を思い出した。義足を使う大人。映像の中には義足は写っていない。その方は、私とあま

り変わらないように見えた。映像を見ていた誰かが言った。

「普通に見えるんだけどなあ。」

私も、心のなかで共感してしまった。でも、その言葉に對して違う誰かが、

「でも、普通ってなんだろうってことだとも思うよ。」

と返した。私の中で、今まで持っていなかった視点が生まれた。体に何も不自由なことがないことが普通というわけではないという、初めての考え方だった。共感してしまった自分に後悔したと同時に、「普通」に対する自分だけの常識で物事を判断してきたことを実感し、恥ずかしくなった。その時考えたことを強く意識せず過ごしてきたせいで、大きな間違いをってしまった。

言われた言葉がきっかけで考えたことは、自分の心に常に留めておきたい。今までの経験から、私は新しい考え方を見つけられた。それを大切に、自分の意見として持ちながら、たくさんの人と関わっていききたい。

自分の中の「普通」が確立していて、普段からその考えを軸として生活していく。それは誰かを傷つけたりすることをしなければ、あくまでも個人の価値観の基準とすることができる。でも、それは少し難しそうな気がするから、私は「普通」という言葉は避けるようにしたい。同じ人間に、普通か普通じゃないかの区別の言葉は

要らないと思う。そんな意識があればきっと、差別してしまうことも、差別によって傷付くこともない。自分だけができるだけでも、その考え方が広がっていけば、全員が生きやすい社会をつくっていけると思う。



優秀賞

「平等なもの」

町田市立鶴川第二中学校 三年

小野 颯士

二年前。祖母が自宅で転んで、股関節と大腿骨を骨折し、車椅子で生活を始める事になった。退院の日から暫くして、祖母の定期検診の日が訪れた。車椅子で乗車できるタクシーは予約が取れず、父母と僕が車椅子を押して電車まで病院まで出掛ける事になった。生憎にも当日は土砂降りの雨だった。車椅子に乗る祖母自身は傘をさす事ができるが、車椅子を押す父に関してはレインコートを着る他なく、母や僕が傘を差し伸べるも風雨に負けて父の全身はびしょぬれになってしまった。祖母は、父に向かって何度も「ごめんね、ごめんね」と謝っていた。駅に着くと、駅員さんに、これから車椅子で電車に乗りたい旨と降車駅を告げ、電車とホームを繋ぐ板を持ってきて貰わなければならない。この光景は、これ迄にも目撃した事はあったが、実際に自分がお願いする立場になると、忙しそうな駅員さんに何だか申し訳ない様な気

がして気後れしてしまった。祖母も同じ様に感じた様で、駅員さんに向かって何度も何度も「すみません、すみません」と謝っていた。

一体、この一日で祖母はどれだけ人に謝り続けた事だろう。「誰かの助けを借りながら生活していく」というこれ迄とは異なる場面と対峙し、祖母は謝らずにはいらなかったのだと思う。

数カ月後。祖母と僕と母は、久し振りにデパートへ出掛けてみようという事になった。当日、嬉しそうな祖母を見て、僕も母も楽しい気持ちになった。然し、そんな晴れやかな気分が台無しになる出来事が起きた。母が銀行へ行っている間、先にレストランを選んでおこうと思つた僕と祖母は、エレベーターを待つて乗り込んだ。その時に中にいた中年の女性二人が

「よくわざわざ車椅子で出掛ける気になるわよね」
「年寄りは大変しく家にいれはいいのにね」
という事を、聞えよがしに喋りだしたので。

この女性達の心無い会話によって、僕は、祖母が、所謂「社会的弱者」と言われるハンディキャップを幾つも背負っているのだという現実を目の当たりにした。女性達が言葉の刃を剥き出しにしている間、僕は、女性達の会話が祖母の耳に入らない様、必死に祖母に話し掛けた。だが多分、祖母にも女性達が放つた刃は刺さってい

たと思う。

あの時の事を思い出すと、今でも腸が煮え繰り返る思いだ。エレベーターの中には、祖母と僕と中年女性二人の他には誰もいなかった。だから庫内にはゆとりがあり、女性達に車椅子がぶつかった訳では無い。乗車に手間取って女性達を待たせた訳でもない。もし、自分の家族が同じ状況で同じ事を言われたら？　そして何より、中年であるその女性達自身が、そう遠くない将来に同じ状況に陥ったら？　祖母がどれだけの身体と心の痛みに耐え、この日のささやかな楽しみを迎えているのか：この女性達が思いを馳せる事はないだろう。想像性の欠如。これが人を傷付け、人を踏みこむに及ぶ最も大きな要因に違いないのではないだろうか。

今の僕にはまだ遠く感じるが、きつと自分が思っているよりもずっと早くに老いはやってくるのだらう。老いの前に、病氣や怪我にみまわれている可能性も考えられる。僕が老いた時、病に伏せた時、病院に行くだけで何度も謝りたくなる気持ちが生じたりしない様、エレベーターに乗るだけでまるで邪魔者であるかの様な扱いを受けたりしない様、高齢者やハンディキャップのある人に対する意識や認識が変わっていたら良いと思う。その為には、どの世代の人も、老いや病を自分自身の事として、理解し許容する必要があると思う。老いてからよう

やく高齢者の気持ちがかかるのではなく、老いに向かつていく自分を現実の事として想像してみるのである。或いは、病や怪我によって、今まで当然と思っていた世界が一八〇度変わってしまう環境を想像してみるのである。但し、想像するには経験が必要と言われる事から、手足の重りやヘッドフォン、特殊な眼鏡をかけて高齢者やハンディキャップがある方の現実を体感する「疑似体験」に参加してみるのも良いと思う。また、想像には限界がある事から、高齢者やハンディキャップを背負う方達自身が、現状困っている事に対し自ら声を上げる事の出来る場も必要である。声を上げるのが難しい場合は、高齢者に寄り添い、代わりに声を届ける人も必要である。そして、その声をしっかりと聞く人もいなければならない。更には、その声をきっかけに今を変えようとする人もいなければならない。歳月は誰の身にも必ず平等に降り注ぐ。皆、一刻一刻と歳を重ねている。自分も、自分にとって大切な人達も、自分の見知らぬ人達も、安心して歳をとれる社会に変えて行けたらと思う。

優秀賞

発達障害の友達から教わったこと

西東京市立ひばりが丘中学校 二年

岡田 滯 来

小学生のころ、同級生に少し変わった女の子がいた。集中力がなくて、話を聞いてなかったことも多かった。忘れ物も日常茶飯事だった。そのため、彼女のことを避けていた同級生も多かったと思う。そんな彼女を、小学生のころの私は、なんとなく軽蔑していた。

ある夏休み明けの席替えで、私は彼女と班が一緒になった。正直、会話が脱線して成り立たないし、グループワークも上手くいかない。私は段々苛立つてきて、彼女に対して強く言ってしまった。

「先生の話聞いてた？ 集中しなよ」

私が出した、言い過ぎた、と思ったころには、彼女は申し訳なさそうに謝っていた。素直に謝られると、どう返すべきか分からなくなつて、私は黙った。

その出来事から少し経って、学活の授業で夏休みの自由研究を発表することになった。彼女は「発達障害・知

的障害」について調べたことを発表していた。内容は難しくあまり理解できなかったけど、身体障害しか知らなかった私は、とても興味を持った。私は彼女に話しかけてみた。

「なんで『それ』調べたの？」

難しい漢字を読める自信がなくて、ノートの表紙に書いてある「発達障害・知的障害」という言葉を指して、聞いた。彼女は一瞬戸惑っていたけれど、「自分自身も、発達障害だから」と答えてくれた。私は驚いた。障害ってもっと遠い存在だと思っていた。益々興味が湧いて、夕飯のとき、家族にも聞いてみた。「発達障害を持っていてる人は意外と多くて、人や病気の種類にもよるけど、話すことが苦手だったり、集中力が低かったりするらしいね」集中力が低い。母の言葉を聞いて、自分の発言を思い出した。

「集中しなよ」

本当に彼女が発達障害なら、仕方ないことだったのかもれない。なのに、強く言ってしまったことに少し後悔した。でも後悔と同時に疑問も浮かんできた。なぜ、自分から障害を持っていると言わなかったんだろう。みんながそれを知っていれば、受け入れられるはずなのに。私だって知ってたらあんなこと、言わなかったのに。考えるほど疑問は増えていったけれど、次の日の学校で朝、

彼女に謝った。

「ごめん！ 障害のこと、全然知らなくて、事情も知らずに酷いこと言っちゃごめん！」

彼女はともびっくりしていた。そして思い出したように口を開いた。

「あの班活動のときのこと？ それなら謝らないで。私が悪かったから」

思っていた言葉と違う言葉がかえってきて、戸惑った私は何を言えばいいのか分からなくなってしまった。すると彼女が沈黙を破った。

「私、障害のせいで、周りの人達に酷いこと言われたり、差別されるのは嫌なんだけど、だからこそ自分で自分の病気を言い訳にしちゃいけないと思う。それは、自分と同じ障害を持つ人や、周りの人達への『差別』になるから。だから、むしろ気を使わずに指摘してくれて嬉しかったな」

今まで軽蔑していた子は私よりもずっと、自分のことも、周りのことも、考えていた。すごく彼女を尊敬した。そして、彼女の言葉で自分の誤解に気づいた。私は相手のことをよく知ろうとせずに偏見をもち、悪気なく差別をしていた。でも、相手がどんな人間なのか、平等を求めているのか公平を求めているのか、など、そういうふうに、周りを理解しようとするだけで少しずつ差別

は減っていくと思う。だから私も、そういう気遣いができる人として、生きていきたい。



優秀賞

広島が教えてくれたこと。

羽村市立羽村第三中学校 三年

橋本 薫

「人間が人間らしく生きる権利」。これは「人権」と検索すると、一番最初に出てくる言葉です。

私はこの夏、はじめて広島を訪れました。その中で私の心に一番残っているのは、平和記念資料館で展示されていた「三人の中学生の遺品」という学生服です。これは当時、市立中学校に通っていた津田栄一さん、上田正之さん、福岡肇さんの三人が身につけていた衣類を合わせて一着にしたものです。そこには、三人全員の顔写真も展示されていました。実を言うと、これまでの私は被爆した人たちのことを、なんとなく架空の人物のように感じていました。しかし、これらの展示を目の当たりにし、彼らが当時その地で紛れもなく生きていたことを痛いほど実感し、衝撃を受けました。

また、戦争を体験し、被爆した橋本赳夫さんのお話も伺うことができました。そこで私は「橋本さんにとって

の平和とは何ですか。」と質問しました。すると「まさに今の状態だ。戦争がなく、きれいな洋服を着て、勉強ができることだ。」と答えてくださいました。やさしい言葉での表現の中につしりと重たいものを感じずにはいられませんでした。

橋本さんがおっしゃった通り、私も現在の日本は平和であると思います。多くの人が清潔な服を身につけ、学校や仕事に通い、勉強することができからです。しかし、同時にこうも考えました。

私たちと同じ中学生の命を一瞬にして奪い去った戦争は、人間が人間らしく生きる権利もまた容赦なく奪っていったと言えるでしょう。世界に目を向けてみても、残念ながら今も全国各地で争いが続いています。戦争は人間が人間を殺します。人間らしく生きる権利を持つていられはるほどの人間がその同じ人間を殺すということですから。これほどの矛盾がほかにあるでしょうか。私は戦争こそが最も大きな人権をないがしろにする行為なのではないかと考えました。私たちが私たちらしく生きていくためには、まず第一に戦争がないこと、つまり平和であることがなによりも大事なのだ、訪れた広島が教えてくれました。

その上で、命を脅かされることのない現在の日本の中で、人間である私たちが「私たちがらしく生きる」とはど

ういうことなのでしょいか。先述の学生服の三人にも、きつとそれぞれに夢や希望があったことでしょう。私もまだ漠然としていますが、夢を持っています。その夢は自分が望んで選んだものです。「私たちがらしく生きる」とは、それぞれが自分で考えて選び、決めることなのだろうと思います。言い換えるなら、それは自由であるということなのです。

将来、自分は何になりたいのか、何をしたいのか、そのようなことを自分で自由に考え、自分で選び取っていくことができることこそが、私たち人間が持つ権利、すなわち「人権」なのではないでしょうか。人権は、私たちが幸せに生きていくために欠かせない考え方なのだと思います。

そしてさらに大切なことは、それを「私」だけが持つものではなく、すべての人が持つ権利だということなのです。一人一人がみんな自分で考えて何かを選んだり、決めたりすることができるはずなのです。同じ権利を持つ者同士が、一方的にそれを侵害しては、戦争と同じことになってしまいます。相手が選んで決めたものに対して誰かが不当に文句を言ったり、邪魔したりするのは権利を侵害していることになるかもしれません。誰もが持っているはずの権利を軽んじたり、踏みにじったりすることをしてはいけません。先述の学生服の三人は容赦

なく踏みにじられてしまいました。そのとき世界が彼らのことを少しでも想像していてくれたのなら、尊重してくれていたのならと思うと、改めて胸が痛みます。相手のことを知り、理解しようとする姿勢を持たなければ、私たちがいとも簡単に踏みにじられてしまうということなのかもしれません。

学生服の彼らや、かつての戦争に巻き込まれた多くの人たちは無残にも命と権利を否応なく奪われてしまいました。今ある私たちの権利はこのような辛い思いをしてきた人たちの上に築かれた、大切なものなのです。

そのことを忘れずに、私たちは私たちの人生を私たちがらしく、幸せを追い求めながら次へとつないでいくことが私たちの大事な役目の一つなのではないでしょうか。



優秀賞

障害者の可能性

あきる野市立西中学校 一年

葛野多緒

僕の母には障害がある。小児麻ひという病気で右腕が動かないし右手は赤ちゃんのような見た目をしている。

障害者というと「弱い」「かわいそう」というイメージがあるが、母にかわいそうと思った事はない。普通に暮らしている。力持ちだし、太鼓の達人は左手だけで持ち、小学生がドン引きするくらい上手。そして僕をいっただって助けてくれる。むしろ強い母だ。

そんな母に子供の頃、何が大変だったか聞いてみた。「みんなと同じにできなくて悔しい事もあったけど、最初から挑戦させてもらえなかったのが嫌だったな。習字教室も入学できなかつたし、騎馬戦やとび箱も見学だった。やってみないと分からないのね。」

と母は言った。この返答を聞き、僕は気がついた。障害者だから何もできないと決めつけている大人がいるのだなど。確かにケガをしたりしたらとの心配からかもしれ

ない。だけど、本人に「やってみる？」と聞いてみてもいいのではないかとも思う。やってみて、できなかったらサポートしてみたり応援もできるのに。僕の考えを母に伝えてみたら、

「本当にね。できない悔しさもあるけれど、できた喜びを何倍も知っているよ。そしてできるための努力と工夫も障害者はすごく持つてるし。」

と言う。そしたら、最初からできないとの決めつけは良くない。無意識の偏見というものだ。障害は本当に人それぞれで見た目で分からないのもあって難しい。何ができるかできないかも分かりにくい。障害者の方が色々なことにチャレンジして、気軽に「サポートお願い」と言える世の中になつたらいいのになと思う。近所に障害者が働くジャム工場がある。一度見学に行つたらみんな活き活きた表情で働いていた。社会のつながりの大切さを感じた。やはり、障害者の可能性を決めつけで奪ってはいけないと思う。例えば、車イスのスーパールのレジ係がいたっていい。

母が最近もやっとする事をもうひとつ。小さい子供が母の右手を見て「変な手、怖い。」と言つた事に対して、その子供の親が「ジロジロ見ないの。」と目の前の障害を無かった物にしてしまう事だそう。確かにジロジロ見られるのは気分が良いものではないが、どこか偏見も

感じる。母は怒ると恐いが障害は恐くない。そんな時どうするの？ と聞いてみた。

「見てもいいよ。さわってみる？ おばちゃん赤ちゃんの手だからお手伝いお願いするかもしれないけどいい？」

と子供に言うときちょっと笑って恥ずかしそうに「いいよ。」と言うのだそう。障害を知らないから恐いのだ。おばけだって見えないから怖い。

ふたつの話を聞いて、大人ほど障害は弱者でふれてはいけないものとなっているのではないのかと思った。だから障害は、恥ずかしい隠さなくてはと思ってしまう。悪いループだ。現在、日本国民の障害者の割合は八人に一人だ。気がつかないだけでもっと身近にいるはずだ。もう少し障害は、オープンでもいいと思う。健常者も障害者も関係なく助け合える社会になるといい。もちろん本人の意志を尊重してだ。そして、感謝の気持ちも忘れずに。

まず僕は母の強さを見習って、自分自身の努力と、困っている人がいたら進んで手助けしていきたい。少しでも無意識の偏見が、なくなりますように



<p style="text-align: center;">奨 励 賞</p>
--

兄との生活を通じて

新宿区立新宿西戸山中学校 二年

清^し水^{みづ} 菜津^{なつこ}子

私の兄は「自閉症」という障害を持っている。一つの能力に特化していて、他の能力が疎かになっている。

兄は、何月何日何曜日に、どこに行った、何を食べたなどを全て覚えていたり、山手線の運用情報を全て暗記していたりと、自分の興味のあることへの記憶力は、一般的な人に比べてずば抜けている。

しかし、疎かな部分も沢山ある。

例えば、コミュニケーションをうまく取ることができない。いきなり感情が爆発したり、なにか単語を暗唱したり、何を考えているのか今でも完璧に理解することができない。また、特別なこだわりを持っている。一度来た道に戻ったり、急に時間を確認したがつたり、何をするにも、自分のタイミングを絶対に崩したがらない。

ある日の夕方、「グループホーム」について放送されていた。内容は、障害を持っている人が、将来グループ

ホームに入ることを検討している。しかし、年々グループホームで働く若者が少なくなっており、グループホームに空きがない状態であるという深刻な内容だった。障害を持つ息子を、親は一生面倒を見ることができない。兄にとっても関係していると思い、私はテレビに見入っていた。

私は、毎年、夏休みに父の実家に帰省したとき、祖母の施設でボランティアをしている。私の祖母は、障害を持った子供をサポートする会社の理事長として、兄のように障害を持っている人と携わっている。そんな祖母の施設で、障害を持っている子供たちと、話をして、一緒に遊んで、そんな経験が、私の気持ちに変化を与えたのだと思う。

ボランティアを始める前の小学校低学年。そんな幼稚な私は、当時、兄に強く当たっていた。なぜ兄は宿題をしないで良いのか、喧嘩をしたら、なぜ兄だけ許されて、私だけ怒られるのか。毎回、親に理由を聞いても「障害を持っているから仕方ない」としか言われてこなかった。私は、納得がいかず、「兄だけ許さないと嘆いていた。すると、普段温厚で、めったに怒ることのない母が、大激怒した。「あなたが当たり前に行えることが、兄にはやりたくてもできない。そのことを理解しなさい。」と言われた。

小学校低学年だった私なりに、その言葉を解釈した。

当時の私は、今と変わらず、友達と話すことが大好きだった。しかし、コミュニケーションが苦手な兄は、私を感じる楽しさも感じる事ができないのだろうか。また、私は、癩に障ったことは、全て口に出す性格だった。自分が癩に障ることも、兄は、言葉で表現することができない。だから、いつも感情が爆発するのだろうか。そんなことを考えるうちに、徐々に母の言葉を理解することができるようになった。

私は、今までの人生、兄と過ごしてきて、どんな人でも、可能なこと、不可能なことがある。それを全て「個性」として捉えることが大切なのだと思った。兄に限らず、障害を持っている人を「個性」と解釈することができれば、自然と、障害を持つ人に優しくすることができると思う。中には、障害を持つ人が「過度に心配されず、障害を持たない人と同じように接してほしい」という人もいる。障害を持たない人と同じように接することも、その人への優しさである。障害を持つ、持たないに限らず、その人が思う優しさを考えることも大切だと感じた。

私は、これからも兄とともに生活していく。その中で、兄が思う優しさを考えて、接していきたいと思う。また、兄のような人の人権が全て保障されていってほし

いと心の底から思う。



奨励賞

温かい心の交流

練馬区立大泉第二中学校 二年

佐久間 美希

昨年の夏、私は田舎の大叔父と大叔母の家を訪れました。その時、障がいをもつ方々と交流する貴重な機会を得ました。到着すると自宅の隣に大きな建物があり、たくさんの方が出入りしていました。「あの建物は何？」と母に尋ねると、「あれは就労継続支援施設（作業所）よ。障がいをもつ方が自立をしたり社会参加をしたりするための支援を受ける場所なの」と教えてくれました。

大叔母は精神保健福祉士であり、その施設の運営をしていました。施設では障がいを持つ方々と支援者が、七つのグループに分かれて活動していました。活動内容は、リサイクル作業、園芸作業、発芽玄米もち等の製造・販売、加工食品の製造・販売、給食作業、農産物の加工・販売、清掃作業と多岐にわたっていました。特にリサイクル作業では、空き缶やペットボトルの洗浄を行っており、それらの資源を作業所に持ってきてくださ

る地域の住民の方々と交流しながら支援を受けていることがわかりました。

施設では、ナス、トマト、キュウリ、オクラなど、さまざまな野菜を育て、収穫していました。オクラの花はとても美味しく、沢山頂きました。また、おもちやパン、唐揚げなどのお惣菜も作り、それらを販売して多くの人々に喜ばれていました。支援者と一緒に、生き生きと一生懸命に働いている姿がとても印象的でした。障がい者の方の一人は、「この作業所にきてから、仲間ができて楽しく過ごせるし、自分が作ったものがありがとうと感謝されることはうれしいよ」と話されていました。他にも、コミュニケーションが苦手な人も、自分のペースで無理をせず、作業されていました。このように多様な作業があるので、それぞれの人が自分の特性や能力に合った仕事ができるのは、とても素晴らしいことだと感じました。

初めて施設に来たとき、私は障がいをもつ方々とどう接したらよいのか分からず、正直少し怖いと感じていました。しかし、挨拶をすると皆さんにこやかに返してくれ、一緒に作業をするうちに自然に会話ができるようになりました。見た目では障がいがあるとわからない人も多くいました。周囲を見回すと、障がい者も支援者も皆が分け隔てなく対等に会話しており、誰が障がい者の方

なのか分からないほどでした。大叔父と大叔母も利用者に対して笑顔で思いやりを持って接しており、多くの人たちに慕われ、信頼されていることがよくわかりました。

この経験から、私は障がい者だからと特別な扱いをするのではなく、一人の人間としてお互いを尊重することが大切だと学びました。学校などで学んだ障がいについての知識では、視覚障がい者が白杖を使用したり盲導犬を連れていたり、肢体不自由者が車いすを利用していたりと、見た目で障がいに分かることが多かったです。しかし、精神障がいには目に見えないため、理解されにくいことがあると感じました。

東京に戻るとき、短い関わりにも関わらず「また絶対に遊びに来てね」と寂しそうに言ってくれる人がいて、胸が「じーン」と温かくなりました。初めて会った私にも優しく接してくれたことがとても嬉しかったです。これまで障がい者に対して先入観がありました。接するうちにそれが間違っていることに気づきました。先入観は、私が障がい者の方たちについての知識があまり無かったことから生じたと思います。

これらの経験を通じて、障がいに対する誤った偏見や思い込みを持たないためには、見た目だけで判断するのではなく、正しい知識を得たり、障がい者と直接話した

り、一緒に経験を共有したりすることが大切だと思いました。私は、障がいの有る無しに関わらず、個性に応じて地域で社会活動に参加し、お互いに尊重しあい、助け合いながら生活できる環境が必要だと思いました。そうすることでお互いに理解を深めることができ、差別や偏見が解消し、皆が幸せに生き生きと暮らせる社会になると思います。



奨励賞

経験と願い、そして誓い

江東区立深川第八中学校 三年

小林蒼欧

小学五年生で岐阜県から東京都へ引っ越して来て少し経った頃、「ド田舎者」という理由でいじめられたことがある。私はこの事を忘れないし、地域ごとの多様性を認め、偏見や差別をなくすべきだという考えがもつと広がって欲しいと思う。

私は引っ越してきた当初から、何人もの男子から「岐阜ってどこにあるか分からない」「ド田舎だから仕方ないよな」「どうせ山とか田んぼとかしかないだろ？」などとわざわざ言われ、ケラケラと笑われていた。今振り返ると、彼らはひどい偏見を口にしていたと気づいた。もし思っていたとしても、言わないで欲しかった。比較的有名な京都や神奈川などから引っ越して来ていれば言われなかった事なのかもしれない。しかし、いったい地域ごとに何が変わるというのだろうか。些細なことかもしれないが、この疑問は長い間私の中でモヤモヤと渦巻

いていた。

そして、とある昼休みに、男子たちが「ちよつとこれを見ろよ」と言っているものを見せあい、大笑いしていた。彼らが見ていたのは「都道府県別魅力度ランキング」で、その時の岐阜県は三十六位だったと書かれていた。「下から十番目は低すぎだよ」「まあただのド田舎だしな」「こんな県に良いところなんてあるのか?」「岐阜に住んでいて楽しかった?」と口々に話し、笑われた。当時の私は耐えきれずに大泣きし、沢山の女子に慰めてもらった。「あんな幼稚な言葉は気にすることないよ」と言ってもらったことに、今も心から感謝している。しかし、一番傷ついたことは、あとからそれを知った先生に「岐阜のことを罵倒されて悔しいのは分かるけれど、そんなこと、でいつまでもめそめそするな」と言われたことだ。確かに、傍目から見ても感じるのは当たり前かもしれない。でも、私にとっては「そんなこと」という言葉で片付けられるような、小さなことではなかった。ただの魅力度ランキングで、生まれ育った大切な故郷に勝手なイメージを付けられ、不当に差別されてしまったのだ。私はただそこで生まれ、ずっと住んでいただけなのに、なぜそれがおかしいと笑われなければならなかったのだろうか。住んでいた場所だけで、個人の価値を計ることなどできないはずだ。私に対して差別的な

発言をした人たちや、今もまだそのような理由で差別をしている人たちには、一度そのことを意識して欲しいと思う。

「偏見」とは、物事を自分のくくりで分けて蔑視の感情を入れることで、それが物事の扱いや排除するような言動になると「差別」と言うそうだ。これを調べた時、私はこれまでに沢山の偏見を聞き、魅力度ランキングを見た人々に差別されていたということが分かった。そう考えると、実は魅力度ランキング自体も偏見や差別の一つになるのではないかと思うようにもなった。

人には思想・言論の自由がある上、四六時中頭の中で多くのことを考えているため、考えること自体は止められない。しかし、それが偏見や差別に当たる場合は行動で表してはならないと思う。それでも現に、禁止されているはずの人種差別をしたり、国同士の争いによって国の人ごと批判して差別をしたり、見た目を理由に差別をしたりして、傷つけられる人は後を絶たない。私の学校でも何人か外国人の生徒がいるが、喋り方がおかしいと言っただけでかわれているという話を聞いたことがある。今はSNSによって様々な情報や個人の意見が簡単に世界中に伝わってしまうため、気づかずに偏見や差別をしてしまう人が余計に増えている。その裏で傷つく人がいる事実や、気持ちを多くの人が理解しない限り、偏見や

差別がなくなることはないと思う。その第一歩として、私自身が苦しい体験をしたことを書くように考えたのが、この作文を書いた理由だ。

私が今願っていることは、世界中の全ての人が持つ今までの経緯と、自分が大切にしているものが否定されずに、どこでも誰とでも認め合えるようになることだ。誰もが生まれながら持ち、人として幸せに生きられるようにするための「人権」が守られるには、偏見や差別をなくすことが先決で、必要不可欠だと思う。自分自身のことや否定されている人は、人としての幸せは手に入らないからだ。

私はこれから偏見や差別を絶対にしないと誓いたい。少しでも「この人や物は気に入らない」と思ったなら、なぜ自分はそう思うのかを考え、その人や物の良いところを探して、絶対に蔑視しない。他人が差別的な言動をしていけば、全力で阻止する。私ひとりだけでもまず行動を起こすことで、いずれ多くの人が差別をやめられると良いなと思う。

<p style="text-align: center;">奨 励 賞</p>
--

いじめ

江戸川区立松江第五中学校 一年

(非公表)

テレビでよく見る小中学生のいじめのニュース。わたしと同じくらいの年齢の子が、いじめに悩んで学校に行けなくなったり、自ら命を落としてしまったりという内容は、わたしの生活とはかけ離れていて、なんだか別世界の話だと感じていました。わたしは友達ちと仲良くやれているし、いじめなんて無縁だと思っていました。だから、そんな別世界のニュースを見ても、いじめについて深く考えることもなかったし、なんとなく嫌なものだ、くらいに思う程度でした。

しかし、ある出来事をきっかけに、わたし自身もそのいじめの世界と関わることになってしまったのです。

それは、小学校高学年のときでした。ひとりのクラスメイトが周囲の人に誘いかけて、Aちゃんを標的に無視しようとすることから始まります。数人のクラスメイトは、

「それは良くないことだからやめよう。」

と止めましたが、皆、「無視しよう」という声に流されてしまい、だんだんとその影響はクラス全体に広まっていきました。広まってしまつと、あつという間にいじめはエスカレートし、無視だけでなく、陰口や事実とはちがううわさ話を耳にするようになりました。仲が良く和気あいあいとしたクラスの雰囲気はぐつと悪くなり、毎日ピリピリしていました。そんなクラスの雰囲気の中、わたしは居心地の悪さを感じながらも、自分がどうふるまえばいいのか分からず、戸惑う毎日でした。

無視が始まつてしばらくたつたある日、わたしは、Aちゃんから相談を受けることになります。Aちゃんはとてもつらそうに、

「わたし、とてもつらくて、どうしたらいいかな。学校行きたくないんだ。」

と言いました。わたしはただ、

「関わりたくないようにはたらいいよ。」

としかアドバイスできませんでした。それからわたしは、学校ではなるべくAちゃんのそばにいて、一緒にすごすようにしました。

そのうちAちゃんはたびたび学校を休むようになりました。そしてわたし自身も、その無視や陰口の標的となつてしまいました。

いざ自分の身に降りかかってみると、それはあまりにつらいものでした。よく「つらいときは周りに相談するんだよ」という言葉を聞きますが、わたしにはそれは難しいアドバイスだと感じました。なぜなら、「つらい」と声をあげることもできないくらいに、心がつぶされるような思いだからです。そう感じたとき、Aちゃんのつらさも痛いほどにわかりました。相談しようと行動したことにも、とてつもない心のパワーが必要だっただろうと感じました。あるとき大した言葉もかけられなかった自分を悔やみつつ、いま自分にできることは、Aちゃんと一緒に居続けることだと心に決めました。

それからわたしとAちゃんは、お互いを励ましながらか、認め合いながら、なんとか一緒に学校生活を続けることができました。わたしたちが支え合って前向きにすごしているうちに、だんだんと、陰口やうわさ話の声は少なくなりました。クラスの雰囲気も、元の良さまではいかないものの、改善されていきました。しかしどこか危なげな感じもあって、またいつ誰かが「いじめ」を始めるかもしれない、そんな危機感をクラスメイトみんなが持っているようでした。なかには、

「流されて、ひどく当たってしまったってごめんさい。」
と言ってくれたクラスメイトもいました。わたしはそんなクラスメイトに対して、許したい気持ちにはなれない

けれど、もう二度と、周りに流されてしまったとしても、いじめはしてほしくない。そう強く願います。

テレビの中の、別世界の話だと思っていたあのいじめが、いま、自分の目の前で起こっている。自分の身にも降りかかっている。その事実は、とても受け入れがたく、苦しく、つらいものでした。Aちゃんとわたしのこの先は、どうなっていくのだろう。クラスはどうなってしまうのだろう。言葉にできない不安と恐怖をずっと感じながらする生活は、からだ自体は生きていても、生きている実感がもてないこともありました。

いじめは、人から、たくさんの大事なものをうばいます。笑顔や明るさ、楽しさ、生きる元気、そして命まで。いじめを受ける側だけでなく、いじめをする側からも、人としての良心や、前向きに生きる気持ちや態度をうばいます。いじめは、人が人として生きていくことをうばう恐ろしいものだ、この体験を通して感じていきます。同時に、人は、認め合い、支え合うことで、強く生きていけることも学びました。わたしは、みんなの中に、無視や陰口ではなく、「認め合い」が広まっていてほしいし、広めていきたいと思えます。

奨 励 賞

人生を変えた戦争

新島村立新島中学校 一年

東野 結美子

私には、今も健在の祖母「タヨばあちゃん」がいる。長崎に住んでいて、今年の夏に六年ぶりに会いに行った。久しぶりに会ったタヨばあちゃんは、前と変わらぬ優しい笑顔で笑いかけてくれた。前にあったのは一年生のときで、沢山の話聞かせてくれたのを鮮明に覚えている。だから、そんな優しい笑顔のタヨばあちゃんがあんな辛い経験をしたと思うと、とてもゾッとする。

満州事変、日中戦争も経験したタヨばあちゃん。十四歳のときに太平洋戦争が始まった。そして十八歳の夏、原爆が落とされる。鋭い稲光で外に出たタヨばあちゃん。幸い爆心地から離れていたものの、猛烈な爆風で体が宙に浮き、何メートルか飛ばされたという。とても怖かったと思う。大勢の人が死に、辺りは焼け、きつと言葉を失っただろう。けれどどん底から立ち上がって生きているタヨばあちゃんは、強くすごい。

そして翌日立ち寄った原爆資料館。展示物を見て衝撃が走った。そこには、信じがたいような戦争の現実があった。私は何も知らなかった。今まで分かっていたはずだったことが全てひっくり返されたような気持ちになった。ひどい火傷を負った人の写真。学生の作文。身内への手紙。厳しい現実を目の当たりにした。そんな中、外国の人たちの動画が目にとまった。わたしはその動画を食い入るように必死にみつめた。「核実験」という実態をこのとき初めて知ったのだった。

世界には、核兵器保有国があることは知っていた。だが、その数九カ国もあるようだ。そのうえ、核開発が疑われている国もあるようだ。そして、全世界での核実験の回数は、二千回を超えて、被害もでている。私はこのことを知る前までは、被爆したのは広島と長崎だけだと思っていた。「日本は唯一の被爆国だ」と聞いてきたからだ。被爆者は全国で十万人を超えている。だが、本当は全世界のもっと沢山の人たちが被爆していることを知った。「実験」によって。

アメリカのネバダ核実験場で行われた核実験では、放射性降下物が広がり、少なくとも十七万人が被爆したそうだ。それに伴い、白血病やがんで亡くなる人が増加したことが明らかになっている。そして、実験による子どもたちの被爆を証明するため、ルイズ・ライス医師を

中心に子どもたちの抜けた歯、約六万本を解析したところ、子どもたちの体内からストロンチウムの量が通常の三十倍になっていたことを突き止めたのだ。とても重大なことだが、ほとんどのアメリカ人はこの事実を知らないようだ。もしかすると、被爆者かもしれない。この事実を知ったらどう思うだろうか。何も知らずに苦しんでいる人たちのことを考えると、とても悔しい。

タヨばあちゃんは、今九十七歳だ。「百歳まで生きろばい！」と嬉しそうに言っていたあの顔は一生忘れられない。もう私のことは分からなくなってしまうけれど、優しくて強いタヨばあちゃんはこれからも変わらないだろう。戦争と共に生きてきた青春時代。部活に打ちこみたかっただろう。友達と遊びたかっただろう。恋愛したかっただろう。私は本当に悔しい。なぜ戦争に奪われなくてはならなかったのか。今、当然のように学校に通えて、学べていることのありがたさ。もっと勉強がんばろうと思える。私はあの笑顔から勇気をもらっている。きっと想像もできないような沢山の思いと戦ってきたはずだ。辛い経験が更にタヨばあちゃんの素敵な笑顔を引き立たせているのだと思う。私はタヨばあちゃんが生きていてくれてとても感謝している。これからも楽しく元気で絶対に百歳まで生きてほしい。

「核」これは、あつてはならない物だ。それは計り知

れない影響を及ぼす。もっと危機感を持つべきだろう。やりたいこと、夢、希望、これを一瞬で粉々にしてしまうのだ。一方で、放射線治療などの医療に活用しているいい面もある。技術が発達しているのだから、正しいことに技術を用いるべきだ。だが、「核兵器」は絶対に廃絶する必要がある。未だに苦しんでいる人達のことを忘れてはならない。本人や遺族の苦しみや悲しみはずっと消えないからだ。人間が生み出した物には人間が責任を持たなければならない。これ以上犠牲者を増やさないためにも、二度と過ちを繰り返さないためにも、自分の命も人の命ももっと大切にしよう。武力は人の人生を変え、奪ってしまうのだということの重大さを改めて知り、しっかり向き合って、訴え続けることが大切だ。それが、私達人間の責務なのではないだろうか



奨励賞

私が感じた同調圧力

立川市立立川第三中学校

（非公表）

部活動の大会の結果が出た。目標通りの優秀な成績を収めることができて、個人としては非常に喜んでいて。その時、同級生の仲間の一人からこう言われた。

「なんで泣かないの？」

周りは確かに、感動のあまり涙を流している人が多かったが、私は喜びたい気持ちの方が勝っていた。そのため、泣こうとは思わなかった。

人前で感情を出す、出さないは個人の自由だし、全員で同じ行動をして感動を分かち合わなければ、仲間ではないのかと私は思う。

去年も同じような場面があった。大会の結果は、目標としていた成績に届かず悔しい思いをした。大会後に差し入れがあり、私を含め、疲れた部員達にとっては、大変ありがたく、嬉しいものであった。その時も、「差し入れに喜んでばかりいて、悔しくないのか。」

と別の人達に言われた。私は、そこで違和感を持った。大会の結果は、悔しいと思っていたが、差し入れをしてくれた人達に、感謝の気持ちを伝えたかったため、それを喜んで味わっていただけだったが、場にそぐわない行動だとみなされて、複数の人達から注意を受けた。

共通の趣味を持ち、一緒の部活動に入っていて、同じ目標に向かって取り組んでいるということは、結果に対して同じ行動、感情を持たなくても、仲間と言えるのではないだろうか。感情を表に出さないから、何も考えていないのではないかと言われるのは、正直傷つく。

様々な考え方を持つ人がいて、それを自分の思うように表す権利がある。また、考えが異なるからといって完全に否定する必要はないと思う。

部活動の練習の場面でも同じことが言える。練習をしていても、失敗してしまうことがあるにも関わらず、

「なぜできないのか」

「練習しているならばできて当然だ。」

などという言葉を投げかけられることがある。しかし、上達具合は人によって異なり、難易度の高いことに挑戦している場合などは、そんなに早くできるようにはならない。また、部活動内で担当していることはそれぞれ違うので、決めつけるような言葉を言われる筋合いはない。

このようなことが続けば、自分は練習してもできない、嫌な思いをするのなら部活に行きたくない、などと考える人が出てきてもおかしくはないと思う。

言った本人は、正しい指摘をして気分がいいかもしれないが、言われる側は場合によってはひどく傷ついてしまう。こういった言動が集団で行われた場合は、立派な人権侵害に繋がりがかねない。

嫌に思っていたとしても口に出さない、励ましの声をかけるなど、人を傷つけない伝え方はたくさんあると思う。思ったことをすぐ口に出すのではなく、一度冷静になつて考え直したり、適切な言葉で伝えたりするなど、相手が深く傷つかないように、十分に配慮することが大切であると考ええる。

どんな活動においても、技術の向上のために、多少の指導を行うことは必要になってくるが、結果にこだわるあまりの厳しい指導は、人権侵害に繋がりがかねないので、防ぐ必要がある。

私は、この問題は部活動だけで起こるわけではないと考え、社会において、同様のケースがないか調べてみた。すると、世の中でも、いじめ、パワーハラスメント、同調圧力などといった形で問題になっているということが分かった。大人でもハラスメントを受けた側の人には、悪意のある行動に耐えきれず、死に至るケースもあ

るようで怖いと思った。

部活動では、指導者と生徒だけではなく、先輩後輩間や同級生の間でも起こりえる話である。部活動であった出来事は、大多数の行動に少数派を誘導する同調圧力にも思える。

このケースは、部活動だけではなく、学校生活においても起こりえる。

私は現在、学級委員として活動していて、クラスメイトに積極的に声をかけていく立場にある。その際に、立場を利用して、クラスメイトにハラスメントを行わないように、気を付けなければならぬと思った。また、部活動でも上級生になって、下級生に指導する場面が増えるので、ハラスメントを起こさないように細心の注意を払おうと思った。

世間でよく言われている、「多様性を重視する世の中」なら、全てをそろえようとしなくて、一人一人が持っている個性を生かせるように、自分も周りも意識しなければいけないと考ええる。

奨励賞

人と言葉

立川市立立川第九中学校 一年

池亀沙羅

「言葉とは何か」

この問いに対して明確な答えを見出すのは難しいはずだ。なぜなら、言葉は世界を形作っているものの一つとして、私たちの生活に深く溶け込んでいるからだ。人を明るいきげにしたり勇気づけたりする言葉は、時に人を傷つけ悲しい気持ちにさせる。そんなメリットとデメリットが表裏一体となっている言葉と、私たちはどのように付き合っていけば良いのだろうか。

ある中学生が誹謗中傷によって自殺したことを私は数年前にニュース記事で知った。インターネット上に悪口を書き込まれたり学校で噂されたりして精神的に追い込まれたそうだ。記事を読んだ私は次のように思った。「インターネットを用いたいじめは誰がそれを書き込んだのか分からない、つまり自分の正体を隠しながら相手を罵倒できる。それを上手く利用して相手の気持ちも考

えず一方的に攻撃しているのではないか。いじめる人は自分の行動に責任も取ろうとしないのではないか。」私はいじめる人の行動に少し怒りを感じた。それと同時に、普段使っている言葉が鋭い凶器に変わり命をも奪ってしまうことに恐怖を覚えた。

他人の言葉によって自ら死を選んではしまうという悲しいニュース記事を多く目にする中、私は小学六年生になった。当時同じクラスになったK君がある日を境に周りから冷たい視線を浴び始め、クラスメイトたちは頻繁に彼の悪口を言うようになった。ネット上のやり取りが原因ではなかったが、K君の発言や行動に皆が鬱陶しさ・目障りさを感じたようだった。それからK君は、グループで活動するときに教室の隅に居たり授業中でも廊下で泣いていたりすることが多くなった。それを先生に伝えると、先生はすでに知っていて心配していたが、徐々にK君との関わりを少なくしているのが目に見えた。まるで見て見ぬふりをするかのようだった。K君は後にその頃を次のように話した。「クラスメイトも先生も助けってくれず、とても悲しかった。自分がこの世からいなくなっても泣く人は一人もいないのではないか。」彼は暗闇の中に一人取り残されたような孤独感を感じていたに違いない。私は彼が落ち込んでるときや悲しんでいるときに声をかけることしかできなかった。それで

も、彼が学校に通い続けてくれることを願いながら私は毎日話しかけることに決めた。いじめを一人で止めることはできなくても、いじめられている人を一人で助けることはできると信じたからだ。声をかけ続けて二ヶ月余りが過ぎ、卒業まで残り一ヶ月程、という頃だった。K君は私にこう言ってきた。「沙羅が僕に接し続けてくれたおかげで、僕は今ここにいる。生きることに自信がなかった僕に勇気を与えてくれたんだ。沙羅の言葉は僕にとつての薬になったんだ。本当にありがとう」他愛もない会話を続けたことによつて彼の命が救われたと実感した瞬間だった。どんなに小さな言葉・行動でも、いじめられている人にとつては大きな支えとなることに気付かされた私は、彼を助けようと行動して良かったと思つた。私は彼と小学校六年生を同じクラスで過ごせたことにとつても感謝している。私を大きく成長させてくれたのは彼のおかげと言つても過言ではないからだ。私は彼に「ありがとう」の言葉を返したい。

私自身も十三年というわずかな人生の中で、他者からの言葉に救われたことが何度もある。自分の力が試される場面で緊張していた私に、母がかけてくれた「リラックスして。きつと上手くいく」試合で良い結果を残せなかつたとき、友達からの「負けることは自分を大きく成長させてくれる。たくさん負けたほうが得だよ」という

言葉。これらに励まされた私は諦めずに前に進むことができた。人の心を癒やし、背中を押してくれるような言葉を、次は私人がのために使いたい。たとえ人の命を救えなくても、小さな言葉で誰かを勇気づけたり、笑顔にしたりしたい。私は人の心の支えとなるような存在になりたいと思つた。

いじめは人間の不満やストレスの発散、気配りの欠如、高い自尊心などが原因で起こることが多いと私は思う。いじめをなくすためには全人類の性格や考えを一から変える必要がある。それは難しいことであるのに加えて、多様性が重視されている現代には合わない方法だ。よつて、いじめを撲滅することは不可能に近い。しかし、いじめを減らすことによつて社会が明るく照らされるための方法はたくさんあるはずだ。皆が言葉の持つ力を理解し、責任を持つて使うようになれば、人を傷つけたり悲しませたりする言葉は生まれまいだろう。いじめを減らすための一番の近道は何か、そして、誰もが明るく楽しい毎日を送るために自分は言葉とどのように向き合つていくべきか、全ての人が自分のこととして捉え、考えてほしいと思う。

<p style="text-align: center;">奨 励 賞</p>
--

今を変えられる勇氣

八王子市立松が谷中学校 三年

(非公表)

私は小学六年生まで東京の二十三区に住んでいました。そこで、私が体験したことです。五年生のころ、私のクラスに義足を右足につけていたA君がいました。その子はいつもクラスの一部の人からかわれていました。最初は私もあまり気にしていませんでしたがA君のことを「ちょっとかわいいそう」と思うようになりました。

ある日私は思い切ってからかっている人達になぜそんなことをするのか聞いてみたところ、「足が変だ」や「しぐさが気持ち悪い」などという理由が返ってきたのです。私はなぜそう思うのか、彼らの気持ちや理解できませんでした。なぜなら彼らは、A君の性格や気持ちなど一度も考えず、見た目だけで判断しようとしていたからです。これはただの差別で、「いじめ」をしているのと変わりないと思い、先生に相談しました。するとから

かっていた人達は先生に注意され、その一日は反省していた様に見えたけれど、次の日学校に行くといじめは以前よりもエスカレートしていて、机に「死ね」「気持ち悪い」などと落書きされていて、A君とすれ違うたびに差別的用語をわざと聞こえるように話していたりと、そんな日々が続きました。それは六年生になっても続きました。私はそのいじめを止めることが出来ず、毎日、見ぬ振りをしていました。今思うと、自分がとても恥ずかしいです。だめだと分かっていたのに。それだけでなく、いじめられているA君に声一つかけることができずにいました。心の中ではいじめている人達に、「やめなよ」と言おうと思っていたけれど、次にいじめの的となるのが自分になるのが恐くて、言えなかったのです。

そんな日々が続く中、母のある体験談を耳にしました。母は学生時代にとっても仲の良い友達Kさんがいましたが、当時クラスメイトにいじめられていたKさんは、母に相談もせず自ら命を断ってしまったのです。母はそのことを今でも鮮明に覚えていて、何もしてあげられなかったことをとても悔やんでいました。私はその話を聞き、今の私の状況と重ねて考えるようになりました。このまま何もせずいたら、クラスメイト一人の大切な命を奪うことになってしまうということ。そして「人の命は、他人が踏みにするものではなく大切に尊いものであ

る。なぜなら、奪われた命は二度と戻ってこないのだから」と深く考えさせられました。そして、いじめをしてる子達は、母のような体験を知らないのだから、平気で人の心を踏みにじって「死ね」とか、軽々しく言えるのだと思い、この気持ちを伝えなくてはならないと考えました。私がこの負の連鎖を止めなくてはならないと思いました。

こんな気持ちになったとき、私には時間がありませんでした。父の仕事の都合のため八王子へ引越すことが一週間後に決まっていたのです。このまま何もしてはいられないと思い、学校に行った私はいじめている人達に言いました。「いじめや差別なんてやめなよ。そんなことをして喜ぶ人なんていないし、悲しむ人がいるだけだ。『死ね』とか言われて自分ならどう思うか考えてみなよ」と言いました。また母の体験談、その後私が考えたことも伝えました。いじめていた人達は、黙って聞いてくれました。私の言葉にうなずいてそのあと、A君のところへ行き、「ごめん。A君の気持ちも考えずに今まで本当ごめん。もうぜったい死ねなんて言わない。いじめや差別も絶対しない。本当にごめんなさい」とあやまりました。私もA君に言いました。「今まで助けてあげられなくてごめん。」するとA君は優しくほほえんで「ありがとう」と言ってくれました。今まで自分の中で

ずつともやもやしていた気持ちが、スーッと晴れたように感じて、少しほっと安心しました。

今でも時々耳にする差別的用語や暴言。それを軽々しく言っている人々は、冗談で言っているつもりだとしても、それが、いついじめなどにつながるかわかりません。相手が気にくわないからと平気で人の心を踏みにじり痛めつけます。また、それを見て見ぬ振りをする自分がいます。ためらってしまう自分がいます。そんな時、母の体験談や、A君の優しい笑顔を思い出します。あの時の自分のように行動すべきことを考え、「やめなよ」と一言言う。すると、また気持ちが少し安心しました。

母の友人であったKさんのことは決して忘れず、悪いことは否定して状況を変えろという行動ができる強い意志をもつことが目標です。そして何よりも、命を大切に、そして今を大切にしていきたいと思っています。



奨励賞

『無意識』を『意識する』

八王子市立第一中学校 一年

相吉 ころ

私の祖父は被爆者であり、母は祖父の子どもで被爆二世、その子どもの私は被爆三世と呼ばれます。

日本は世界で唯一原爆を投下された国です。今から七十九年前の八月六日に広島、九日に長崎へ原爆が落とされました。

その広島に私の祖父は生まれました。原爆が投下された当時、祖父は一歳になる少し前だったそうです。その日兄の葉をもらいに行くために、まだ赤ちゃんだった祖父は日傘代わりのコウモリ傘をさしたお母さんにおんぶしてもらい外を歩いていました。原爆が投下された瞬間、お母さんは傘で隠れていなかった方の片足が焼け、失ってしまったそうですが、祖父は傘で身体がすっぽり隠れていたのです。直接光を浴びることはなくやけどもありませんでした。しかし後に大量の放射能を浴びたこと

がわかり、祖父は被爆者として認定されました。

祖父は若い頃から亡くなるまでいろいろな重い病気にかかっていましたが、身体の一部を失ったりやけどをしていたわけではないので日常生活はふつうに送っていました。

祖母が祖父と結婚しようと思った時に周りの人から「被爆者とは絶対に結婚しない方がいいと思うよ。だってだんなさんがどんな病気になるかもわからないし、生まれてくる子どもも病気になるかもしれない。絶対に辛せになれない。」などと大反対されたそうです。それでも祖母は祖父と結婚しました。そして、祖父は私が二歳くらいの時に病気で亡くなりました。

祖母は祖父が被爆者というだけで、「結婚しないほうがいい」「絶対に辛せになれない」とみんなから言われていました。確かに祖父はたくさんの病気にかかっていましたが、祖母は辛せに暮らせていたので、結婚を反対していた人たちは自分の想像や決めつけで発言していた、ということになります。みんなは祖母のことを思っただけで無意識に言っていたにちがいません。しかし、その無意識の発言が人の心を傷つけているということに気づかないと、それは祖父の『辛せに生きる権利』をうばおうとしていたことになります。

もしかしたら祖父は被爆者というだけでいろんな場面で差別を受けて生きてきたのかもしれない。被爆者手帳を持っていたので医療費助成などの補償を国や市から受けてはいましたが、差別によって傷つけられた心のケアを受けることはありませんでした。

ケガややけどは目に見えているのですぐに治療や処置ができます。しかし、心の傷は目に見えず本人にしかわかりません。目に見えない心の傷を作らないためには、まず自分の『無意識』を『意識する』に変えていかなければならないと思います。自分がされたらどうか、言われたらどう思うかを想像する力が大切です

私も無意識に人の心を傷つけていることがあると思います。私は目が悪いので、外に出るとまぶしくて顔をしかめる癖があります。でもそれをにらまれていると思われてケンカになったことが何度もあります。私の無意識な行動が相手を傷つけています。でもその『無意識』を『意識する』に変えればひとつトラブルがなくなります。『無意識』は『無意識』だからなかなか自分では気づけないけど、まずは言ったり行動する前に想像をするということを習慣にしたいと私は思っています。

『無意識』を『意識する』に変えていきたいです。



奨 励 賞

目に見える障害と見えない障害

八王子市立四谷中学校 一年

城川 悠成

僕には三つ年上の重度障害を持つ姉がいます。現在、特別支援学校の高等部に在籍し、主に母の送迎で通学しています。

家では二十四時間酸素吸入が必要で、話せない代わりに苦しい時は酸素モニターのアラーム音が知らせてくれます。普通は病院じゃないと見る機会の無い医療機器を、我が家では日常的に使って生活しているので、僕は特別に思った事は今までありません。

姉の医療機器に小さい頃、興味を持った事があります。そして、姉のお世話をしたくなりました。僕は成長して色々な事が出来るようになっても姉はずっと何も出来ないままなので「妹」だと思っていた時もあります。移動はいつも車椅子で、小さい時は車椅子を押す事が楽しくて病院の待ち合い室で勢いよく押して売店に連れ去っていったりして、母に注意された事もありました。姉の

リハビリにもよく一緒に付いて行き、僕は遊具で遊びながら姉がリハビリしている様子を見てきました。僕はずっと姉がいつか歩けるようになると思っていました。周りの友達と姉弟と同じ様に遊べるようになると思っていました。

しかしその願いが叶わないと思ったのは、僕が小学六年生の頃でした。

ずっとリハビリに通ってもずっと歩けないままなので、母にその事を聞いてみると、「お姉ちゃんね、障害があつて歩けるようにはならないけど、これ以上悪くならないようにリハビリに通っているんだよ。」と言われ、悲しい気持ちになったのを覚えています。

姉は三ヶ月早く生まれ、その時の体重は六六六gしか無かったそうです。産まれてすぐ、保育器に入り、様々な治療を受けて、何度も命の危機を乗り越えてきました。その時医師から「障害が残ります」と言われ、両親はそれを受け入れて育ててきたそうです。

その時は家族と一緒に家で過ごす事も、一緒に出掛けたりする事も想像できない状況だったそうです。今、家族そろって生活している事が奇跡であり幸せな事だと母は言いました。

僕は姉が一生歩けなくて、話せなくてかわいそうと思っていました。今でもその気持ちは消えません。姉の

気持ちになって今でも考えてしまいます。友達の姉弟のように一緒にゲームも出来ないし、周りとの違いを感じ、悲しい気持ちになった事もあります。

でもその考えが少し変わったのは僕が姉の学校公開に母と一緒にいった時、満面の笑顔で先生や友達と楽しく過ごしている姿を見て、姉は障害がある事を悲しんではおらず、むしろ障害があると思っていない事が分かりました。しかし、社会に出れば障害者には様々な障害があります。一緒に家族と出掛けたり、旅行をした時に、車椅子だと狭い道や、大きな段差があったり、車椅子不可のお店もまだまだ多いです。でもその障害を家族で一つ一つクリアしたり、またその替わりになる事に変更する事で、皆と一緒に楽しむ事を経験してきました。障害があつたらそれを取り除く事を出来る人が行つていけば、障害者の障壁は少しずつ無くなり、皆平等に生活しやすくなるのではないかと、姉を通じて学んできました。自分自身も発達障害という「障害」があります。話す事が苦手で時々友達に変な顔をされる時、僕は「相手が障害だ」と思った事があります。目に見えない障害があるという事が知られていないのも僕のような発達障害者には大きな「障壁」です。障害があるという事をこの人権作文を通して皆に知ってほしいと思います。人権とは、誰もが生まれながらにして持っている、人間として幸せに生

きていくための権利です。障害の有無に関わらず、一人ひとりがお互いを認め合い、助け合つていく事で世の中は生きやすくなるのではないかと考えています。



奨励賞

「たった一言」で変わる人生

町田市立鶴川中学校 二年

(非公表)

「あなたはいよいよね。頭が良くて。どうせ簡単に高得点がとれるくせに。」「あいつがどうせなんとかするから平気。」私はこれらの言葉を何度も何度も呪いのように言われ続けてきました。この言葉が増えてきたのは中学生になってからでした。小学校から中学校に上がって慣れない環境の中で私は勉強のことがとても不安で第一定期考査のときには、食事や睡眠などの最低限の生活プログラム以外の時間を全て勉強にそそぎました。そうしたら思っていたよりも高得点をとれて、その時の私は安心していました。これがきっかけとなるとも知らずに。二学期に入ってから少しづつ環境が変わってきました。先生からも友達からも任されることが増えてきて、それと同時に私へ向けて周りの人から「どうせ」という言葉も増えていきました。初めは任されたことに全力で取り組んでいたし、自分が頑張ったことを認められて

頼ってもらえているようで喜んでいました。でもそんな喜びもつかの間、とある日の先生の一言で絶望に変わりました。それは委員会を決める日に学年委員を誰がやるか先生や友達と話していた時に「あおいがやったら？ 顔もほら、学年委員ほいしさ。いろんな事やってくれるし。」と言われたことです。この一言を聞いて私は、目の前が真っ暗になりました。先生からしたら冗談混じりの軽い一言だったかもしれない私が気にしすぎなのかもしれないけれど、私にとっては「ああ。先生はそんな風に考える人なんだ。今まで任されてきたことは先生からのお願いではなく先生からの押し付けだったんだ。」そんな風感じてしまっただけなのかもと考えるようになりました。友達のこととは大好きしそんな風に考えたくなくてもどうしてもトラウマのように先生の言葉がよみがえってきて、あまり仕事を受けなくなっていました。そしてある時私が友達に勉強を教えてほしいと頼んだとき、友達は「あおいちゃんは頭良いんだからそのくらい分かるでしょ。」と言われました。他の子にも「勉強しなくたってどうせ点とれるでしょ。私と違って。」などと言われることが多くなりました。けれどこの子たちはみな私の成績もテストの点も知らないはずなのに。私はこれ以上頼られるのが怖くて誰にも言ったこと

はありませんでした。そしてまた「みんなも私のことを見た目で判断したのかな。」と思うようになりました。私だって何もしないでこうなったんじゃない、頑張ったから良い結果にたどりつくことができたのにと何度も思いました。そして結局人は見かけでしか判断できないんだとも。このことから自分には「頭が良くてなんでもやってくれる人」というレッテルが貼られていたんだと気づきました。それからは何度か周囲の人が思い描く私を変えするために少し力を抜いてみたりしました。でも今までより衰えると、失望したような目で見られて、頑張っても、みんな同じようになろうとしても辛いなら、自分が幸せに生きられる道はどこにあるんだろう。みんなみたいに頼り頼られて、勉強の話も楽しくできるような関係になりました。周りからしたら周りの言葉なんて気にしなくてよかったです。周りからしたら周りの言葉なんて気にしないで好きにすればいいと思われるかもしれない。でも私にとっては、みんなが思う私を壊してしまつたら私の居場所はなくなってしまうのではないかと怖さや不安で押しつぶされそうになってしまふんです。そしてこれは永遠に続いています。

人間は誰かからの言葉で良いようにも悪いようにも人生が左右されます。そしてこれが悪い方にくくとその人の思考を縛りつけてしまうということを私は自分の身を

持つて痛感しました。そして人間は自分の想像した相手の姿を押しつけがちです。どうせという言葉を使って、自分にとって都合のいいように相手を縛りつけ、自分の理想をぶつけてしまうのだと私は思います。また私は自分の経験から強く思ったのは、一言の重さを理解してほしいということですが、相手の気持ちを讀み取ることとはできないからこそ、一つ一つの発言に気をかけて、言葉で人を傷つけたり、苦しめたりする世の中ではなく、言葉で人助けられる幸せにできるような世の中になつてほしいです。たかが一言。されど一言。私はきつとこれからも周りの言葉に縛りつけられて生きていくのかもしれない。それでも私のように言葉で傷つけられた人には、私と言葉で救いの手をさしのべられるように周囲を気遣う心を大切にしていきたいと思います。



奨励賞

自分らしくあるために

稲城市立稲城第三中学校 一年

（非公表）

あなた達は、障がいなど個性を持った人達にどんな印象を持っていきますか。知らないうちに周りの人とは違うと思ったり、心の中で「かわいそう」と思ったことはありませんか。私はそこそが差別なのだと考えます。様々な障がいを持っている人はたくさんいますが決して悪いことではありません。例えばどんな障がいや病気を持っていて他の人と同じように懸命に生活しているのです。

私は、一歳半の時に「円形脱毛症」になりました。そのせいで全身の毛が無くなってしまい、今も治療が続いています。でも、なかなか成果はできません。外出をするとき見た目がみんなと違うだけなのに指をさされたり、避けようとする人もいました。でも、それは差別であるし、私と家族は辛い思いをしました。私の家族は幼い頃から「自分は自分だからありのまま堂々としていれば良

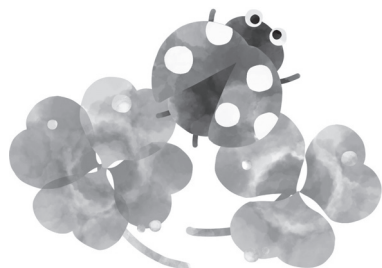
い」と教えてくれました。学校へも「円形脱毛症」への理解を広げるために働きかけてくれました。今、私はとても大切にされていると感じています。みんなも仲良くしてくれそうです。私に「かわいそう」という人は誰一人いません。みんなが私のことを受け入れてってくれています。だから私は、他の人と同じようにしてもらえて幸せだと感じているのです。

バリアフリーという言葉がありますが、この言葉は建築物の段差などを無くすという意味で使われています。今では多様な人が存在するこの世の中からバリアを無くす取り組みを表すようになりました。今、日本にはあらゆる障がいを持った人がいます。そんな中、これからは誰もが暮らしやすい社会にして行かなければなりません。調べてみるとバリアは三つほどあることがわかりました。一つ目は交通機関や建物などの利用に関わる物理的なバリア、二つ目はルールにより障がいの人が機会をうばわれる制度的バリア、三つ目は周囲からの偏見や差別、無関心など障がいの人を受け入れない意識上のバリアだとわかりました。こうした社会全体のバリアフリーが大切なのだと思付かされました。でも私は、どんな立場でも安心して自由に生活をするために一人ひとりが多様な人のことを思いやる「心のバリアフリー」が何よりも大切だと考え、この考え方が広がって

いくことを願っています。相手を思いやっているつもりであつても、もし「かわいそう」などの言葉をかけると様々な個性を持った人達を傷つけてしまいます。自分のことを「かわいそう」な人間だと思いつつながら生活するほど辛いことはないと思うからです。他の誰ともかわりがない一人の人間として生活したいと願っているはずだからです。このように、時には心配をして思いやっているつもりでも親切心が人を傷つけることもあるのです。例えば、重たそうな荷物を持っている人に「持ちましようか」と言った時、ありがたく感じる人もいれば、弱者だと見下されていると感じる人もいます。これもまた無意識な差別であることを理解しておかなければなりません。私達は、相手の立場に立つて、よく想像し考えるから話し、行動をとることが大切なのです。そして、リアを感じている人が少しでも自分らしくいられるように行動を起こしていくべきだと考えます。また、様々な個性を持つ人達自身も自ら心と行動を広げていく必要があると実体験を通して感じています。自分から「人とは違う」と身構えてしまうことが新しいバリアを生む場合もあると考えるからです。

誰もが生まれながらに自分らしく生きる権利を持っているのです。しかし、人は自分と人との違いを比較したり、批判したり、深く考えないままに思ったことを言葉

にしたりすることで知らず知らずのうちに互いを傷付けあつていくのかもしれない。だからこそ、言動に責任を持つことが必要なのです。強く意識することもなく、同じ人としてごく自然に互いを受け入れ、苦手は助け、得意はいかして、みんなと一緒に支え、育ちあいながら、ありのままを認め合うことのできる社会にしていきたいです。私は「円形脱毛症」という病気を個性として受け止めて、堂々と自分らしくあります。また、そうすることで、これから出合うまわりの人達にも自然に受け入れてもらえる強い関係性を作って行きたいです。



奨励賞

知ろうとする気持ち

多摩市立和田中学校 二年

佐 宗 泰 知

僕は、中学一年生の時に「五組」と呼ばれる特別支援学級に在籍していた。小学校の高学年の時に、学校生活や勉強に不安が強くなってしまったので、家族や先生、就学相談の担当の方と相談して、五組に入ることになった。入学当初は、先輩と同じ教室で過ごすことや教室が他のクラスと離れた場所にあることなどに違和感を覚え、「やっぱり小学校の友達がたくさんいるクラスがよかった。」と言って、気分が落ち込んでいた。

しかし、入学して一週間くらい経つと、少しずつ学校生活に慣れてきて、周囲の様子が見えるようになってきた。五組では、自分の力に合った学習内容を先生方が丁寧に教えてくれる。将来の自立のために必要なことも、実践を通して教えてもらった。僕は、書くことや計算することに苦手意識が強かったが、少しずつ勉強に自信がもてるようになってきた。五組の友達は、同級生も先輩

もとても明るく、また優しい人が多かった。五月の体育大会では、力を合わせてリレーや大縄跳びを頑張った。目標の記録を達成でき、大きな拍手をもらった。僕は、運動が得意なことに加えて、友達のことも大好きだったので、五組だけでなく他のクラスの友達とも楽しく過ごすことができた。十月には、音楽発表会があった。五組は、一年生から三年生の全クラスの発表が終わった後に発表した。ハンドベルと歌を発表し、緊張しただけ大きな達成感を得ることができた。しかし、それと同時に感じた思いがあった。(他のクラスのように、僕も結果発表でドキドキしたり、優勝目指して頑張ったりしてみたいな。)

体育大会でも音楽発表会でも、五組は「五組」として、自分たちの目標を立てて取り組む。他のクラスと勝負をすることはなく、一緒にチームとして活動することもない。学校生活も基本的には別の教室で過ごす。だから特別支援学級の生徒と通常学級の生徒が関わりを深めるには、部活や委員会などに入って自分から関わりを深める必要がある。僕は、ハンドボール部に入ったことと、いくつかの教科で交流学习をさせてもらっていたので、五組以外の友達が増えた。それは、とてもうれしいことだった。

そして、二年生に進級するタイミングで、僕は、通常

の学級に通うこととなった。五組の友達と離れることに寂しさや不安があったし、新しい環境に入るのは、少し緊張した。でも、小学校からの友達や一年生の時に部活や交流学习で仲良くなった友達が、温かく迎えてくれた。二年生になって半年ほど経ったが、僕は友達や先生のおかげで、本当に充実した毎日を過ごしている。勉強についていくのは正直大変だが、それでも頑張ろうと思えるだけの楽しいことがたくさんある。クラスや学年の友達は、いろいろな話をしたり、分からないことを教えてくれたりする。また、部活では、同じ目標をもつ仲間同士で意見を出し合いながら体を動かすことが本当に楽しい。頼りにしていた先輩が引退し、次は自分たちが部活を支える番だと、やる気に満ちあふれている。そして、校内で五組の友達を見かけると僕はうれしくなって話しかける。五組の友達もまた、笑顔で話をしてくれる。

「泰知はどうして五組にいたの。」

と、友達に聞かれることがある。僕は、

「勉強が苦手だったから。」

と、答えることにしている。特別支援学級と通常の学級。確かに違うことはある。勉強の仕方も違う。通常の学級の中には、「特別支援学級」という言葉を聞いただけで「全然別の場所、関係のない人たち」とひとくくりに

に遠ざける人、また、支援学級がどんなところなのかを知らうともしない人がいることも確かだ。でも、僕にとっては、どちらの学級も「楽しくて、やりがいがある」、先生や友達が温かく接してくれる場所”であるという点では何も変わらない。これはどちらの学級も経験できた僕が言うのだから間違いない。どんな学級で学んでいるても、同じ社会で生きる仲間だ。僕は、将来どんな仕事をするかまだ分からない。でもどんな仕事に就いても、そこで出会う人たちのよさや得意なことを見付けて優しい気持ちで関わり合っていきたい。



奨励賞

情報と繋がりで学びの機会を守る

府中市立府中第一中学校 二年

中西 俊介

文部科学省の発表によると、令和四年度全国の中学校における不登校生徒は約十九万四千人いるそうです。その数は年々増加していて十年前と比べると二倍以上、割合でいうと十六人に一人の中学生が不登校であることを知りました。

どうして不登校のことを調べたのかというと、僕自身が登校することが辛いからです。僕から見える他の中学生はみんな楽しそうであらやましく感じることも多かったのですが、中学校に登校できない人や、しない人が思ったよりもたくさんいることに驚きました。

僕は学校生活が苦手です。いろいろなことに時間がかかるので、行動が人より遅れてしまうことや、言いたいことがスムーズに言葉にできないこと、授業時間内に作品や課題ができないことが多いです。また、とても怖いと感じる先生や同級生がいます。過去にその人から向け

られた言葉や表情、その時の音や匂いや景色が、頭の中にいっぱいになり苦しくなります。

僕は学校生活の悩みや体調のことを相談するために病院に通っています。主治医の先生からは、

「学校を休むことは悪いことじゃない。辛い時には頑張らずに休むことが自分のためになる。」
と言われています。

我慢しすぎたり、頑張りすぎたりして、心も体もエネルギーが空っぽになってしまうと回復にとっても長い時間がかかるそうです。

そうなることは避けたいし、我慢できないほど辛い日もありますが、僕は毎朝登校しています。なぜかということ心配だからです。

休んだ日に何の授業があったのか、どこまで進んだのか、授業についていけなくなったらどうしよう、宿題は出たのか、テストの予定はあるのか、もらっていないプリントはないか、先生に会えなくて質問できなかったらどうしよう、班活動で迷惑をかけなかったか、自分だけが把握していないことはないか……。

風邪で二三日休んだだけでもわからないことだらけで不安になります。登校しなくてもこんなふうになるから、登校することを選んでいきます。

学校生活が辛くて不登校になっている中学生の中に

は、また元気に登校するためにほんの少し休憩しようと考えていた人もいたのではないかと思います。ただでさえ久しぶりの登校は緊張するし勇気が必要です。その上、数えきれないほどのわからないことやどんだたまっていく課題などを想像すると、怖くて怖くてたまらなくなるのではないのでしょうか。

日本には義務教育の制度があります。小学校一年から中学校三年までの九年間、すべての子どもは原則として学校に通うことになっています。僕は以前まで「義務だから登校しなければならない」と思っていました。しかし、義務教育とは、保護者が子を学校に通わず義務であって、子ども自身が学校に通わねばならないということではありません。子どもがもっているのは「教育を受ける義務」ではなく「教育を受ける権利」です。

不登校の人の中には、学校以外の安心できる居場所を見つけ、自分らしい学び方をしている人もいると思います。ただ、学校に行きたいのに行けず、学べないことで不安な人もいます。そんな人達に必要なものは、細やかな情報や繋がりでないのでしょうか。

今はICT教育が推進されていて、僕たちも一人一台タブレット端末を自治体から貸し出されています。これを活用すればきつといろいろなことができると思います。

自宅や別室にいても希望すれば授業や話し合いに参加することができます。話すことが難しければ文字でも加できます。同級生の顔や名前を覚えることができます。授業の進度や、宿題の内容、次の授業の予定や持ち物、テストの予定、行事の練習予定などをいつでもチェックできます。授業や宿題のプリントが自宅でプリントアウトできるので自分のペースで取り組むことができます。悩みや質問をメールで相談できます。そして、学校に登校することが難しい場合にどのような学びの選択肢があるのか教えてくれます。

そんなことができれば僕はとても安心です。

学校は教科を勉強するだけでなく、行事や部活、係や委員会、給食などのさまざまな活動や交流の中でたくさんのおもしろいことを学べる場所だと思います。でもその全てには参加できない人もいます。全てに参加しないのはずるいとか、毎日登校することが普通だとか、休んでるのに遊んでるのはおかしいだとか、そんな考えはなくして、それぞれが自分らしい場所や方法で学ぶことができればいいなと思います。

将来、自分自身で選んだ道を歩み、充実した生活を送るために僕たちは教育を受ける権利をもっているのです。

奨励賞

私の生涯

府中市立府中第二中学校 三年

(非公表)

私は生まれつき知的障害を持っています。知的障害は簡単に話すと生活に遅れがでる障害です。

幼稚園では生活面がみんなと比べると私だけでできてないことがほとんどでした。「私だけなんでできないんだろう」と凄く悩んでました。

幼稚園にお母さんが迎えに来る時に毎回「○○ができません。」と指摘されました。正直凄く悲しかったです。みんなと遅れてるのもあって友達は少なかったです。

そんな中私はおままごとに入りたくて私は「入れて」と言ったら「やだ」と言われました。他のまわりの子はみんな入れてもらってたので私だけ断られてびっくりしました。

小学校では普通級に入りました。勉強が他の子と凄く遅れてました。毎回テストは0点でした。そんな自分が嫌で仕方がなかったです。

小学一年生の時に特別支援学級の見学をしました。そこで「やっぱり自分は変なんだ」と凄く落ちこみました。

家ではお母さんが「特別支援学級に入りたい」と話していました。お父さんは反対でした。二人が私のせいで怒鳴り合いになってしまいました。

結果的に私は二年生の二学期に特別支援学級がある学校に転校しました。特別支援学級に入って授業がわからない、勉強ができないと言う悩みが無くなりました。

転校してすぐ運動会がありました。普級の生徒と徒競走を走りました。走ることに得意な私は一位を取ることができました。同じ学級の子や、先生がびっくりして凄く喜んでくれて、沢山のの人に褒めてもらえました。今まで人にこんな認めてもらえた事がなかったので凄く嬉しかった事を覚えてます。

この事から少しずつ自信になり学校での生活も安心して楽しく過ごせるようになりました。

私の障害は見た目は普通です。生活面において自分で出来る事が多く普通に過ごせます。障害は見た目には分かりません。なので、周りの人には気が付かれず、なかなか人に理解してもらえない事が多くて困る事もあります。「なんで普通なのに特別支援学級にいるのかわからない」と言われる事もあります。

学習ができない事は、自分でもよく分かっているのによく落ち込んだ事がよくあります。「なんで自分はできないんだろう、自分は何をやってもだめなのかな」と不安の中を過ごしています。覚えた事を何度やっても忘れてしまい覚えられません。一つの事を覚えるのは人の何倍も時間がかかり、何度も繰り返し書いて覚え凄く疲れま

す。
私は小学一年生から合唱団に入っていて歌う事が大好きです。

中学二年生の時に、先生とお母さんに普通級の音楽の交流授業を勧められました。自分に自信なく悩みましたが好きな事なら頑張れるかもしれないと挑戦する事になりました。

合唱コンクールでは普通級のクラスで参加して歌う事ができました。障害があるけど普通級のみんなどと一緒に舞台上で立てた事が凄く嬉しく思いました。

障害があつてなかなか理解してもらう事が難しいと思いました。自分の得意や好きな事を一生懸命に学べる場所を作ってくれたこの環境に凄く自信になりました。世の中には色々な障害を持っている方がいますが何か一つでも一生懸命になれたり、生きがいを持って過ごせる社会になるといいと思いました。



奨 励 賞

笑顔のバトン

国分寺市立第二中学校 三年

芳根春歌

「おはよう」夜にリビングへ入ってきた祖母が、そう口にする。眠たそうな声に私はおはようの一言を返せない。祖母の目に映る空には、朝も夜も太陽が昇っているのだ。

私は両親、姉、そして認知症を患っている祖母と暮らしている。昔は私と一番仲が良くいつも私を笑顔にしてくれていた祖母は、気付いた頃には昔の穏やかさを無くしていた。祖母の病気が発覚したのは今から四年前のことだった。覚えのない飲み物が人数分注がれていた。日常会話が噛み合わなかったりすることに気付いた母が、祖母を病院へと連れていったのだ。祖母は認知症と診断された。それからゆつくりと病気が進行していった。今では数秒前の自分の行動さえ思い出せなくなってしまう。朝と夜などのはっきりとした認識のみならず、時間の感覚を忘れてしまい、朝の七時に起きている

と「こんな時間なのになんでまだ起きているの？」と不安がる。夜でもおはようと言って起きる。私の見ているテレビの意味もなくなったばかりと眺めてくる。私はそんな祖母と話すのが面倒くさくて、知らない人みたいになつてしまった祖母が怖くて「なんでそんな事が気になるの？」と怒ってしまった事が何度かあった。その度に祖母は悲しそうに部屋に戻っていくのだ。そうすると私はいつもやるせない気持ちになる。まともに話をする事が難しくなつてしまった祖母に酷い言葉をかけてしまったという事実から、罪悪感を感じるのだ。すっかり祖母との関わり方が分からなくなつてしまった私は祖母とあまり話さないようになってしまった。

中学二年生になつた私に、職業体験というイベントが訪れた。ずらりと並んだ職業の中で私の目にとまったのは介護の仕事。「他のお年寄りと関わる事ができたら、祖母とまた昔のように話せるようになるかもしれない」とそう思った私は、迷いなく体験先に老人介護施設を選んだ。私が職業体験をさせていただいた施設には、認知症だけでなく様々な理由で通っている利用者様がいらつしやう。耳が聞こえない方、足が動かない方、目が見えない方。沢山の方々が毎日仲睦まじく過ごしていた。その中で一番私の印象に残っている方は、耳と目が不自由なおばあさんだ。利用者様とうまく話せなかった私の

緊張をといてくれたのが、そのおばあさんだった。おばあさんは私に色々な話をしてくれた。自分の家族の話、施設で一番好きな給食の話、昔就いていた職業の話。耳が聞こえにくいながらも私の声に懸命に耳を傾けてくれた。会話が進むスピードは凄くゆっくりだったけれど、そのおばあさんとお話することはとても楽しかった。コミュニケーションの時間が終わって、また来ますねと声をかけるとおばあさんにこんなことを言われた。「あなたみたいな素敵な子もつと増えると嬉しいわ。若い子とお話するだけで私たちみたいな老人は元気になるのよ。」その言葉に私は笑顔を返した。嬉しくて「ありがとうございます」と手を握った。その日はいつもよりも祖母に笑顔を向けられた気がする。

職業体験中沢山の利用者様とお話をしたが、利用者様はみんな口を揃えて「もつと別の選択肢があっただろうにわざわざこんな施設に来てくれてありがとう」と言っていた。他の場所に行った方が楽しかったはずだと言う利用者様に、そんなことはないですよと返しても全く聞き入れてもらえなかった。認知症や身体の障害を持っている人を介護することは思っているよりもずっと大変だ。利用者様はみんなそれを分かっているのだろう。ふと、祖母を思い出した。家族に冷たい言葉をかけられた時、祖母はどう思ったのだろうか。思い浮かべた祖母の

顔は悲しそうなものばかりだった。父が呆れたようにため息をついた時、姉が「用がないなら部屋に帰って」と言った時、祖母はどんな気持ちで家族に背を向けたのだろう。本当はただ私たちと話がしたかっただけだったのかも知れない。黙って部屋に帰って行くのは、いつも世話をしてくれているからといって我慢しているだけなのではないだろうか。介護をする時、接しているのは私の大好きだった祖母なのだということを忘れていないつもりだった。でも実際は私の大好きだった祖母ではなく、知らない誰かに接するような気持ちで介護をしていたのかも知れない。そう気付いてから私は祖母と話す機会を増やした。

祖母に分からない事が増えても、それを無くすことはできない。だが減らすことはできる。今では廊下に私の手書きの張り紙がいくつか張ってある。トイレの場所を示したり、時間を分かりやすくするものだ。祖母に分からないことは私が教えよう。そして、祖母が少しでも元気で過ごせるように私が沢山笑わせてあげよう。昔祖母が私にそうしてくれていたように、今度は私が笑顔を返す番だ。

<p style="text-align: center;">奨 励 賞</p>
--

後悔からの一歩

調布市立第七中学校 二年

武田花

「すみこおばあちゃん、遊びに来たよ。」遊びに行ったときには必ずそう挨拶する。

すみこおばあちゃんは私の曾祖母だ。すみこおばあちゃんはジザやエビフライなどが大好物で、趣味は俳句を詠むことや絵手紙を描くことだった。意外と子供っぽいところがあって、面白いすみこおばあちゃんが私は大好きだ。

すみこおばあちゃんは認知症だった。前は、名前を言うとき「ああ！」と反応してくれていた。だが、今は名前を言ってもぼーっとしていて、あまりピンときていないようだった。

遊びに行く度に認知症は悪化していた。それでも、遊びに行ったときは毎回自己紹介し、筆談ボードなどを使って話していた。私の近況や最近ハマっているものなど、すみこおばあちゃんに少し質問しながらも、ただだ

だ私が一方的に話しているだけだったがとても楽しかった。すみこおばあちゃんが質問に答えてくれるたびに一喜一憂し、周りに居た家族に報告したりしていた。特に、私の好きなテレビ番組をおすすめし、「面白い？」と聞いたら頷いてくれたのがとても嬉しかった。

しかし、だんだんと話しかけなくなっていく。理由は少し面倒臭くなっていたからだ。また、話しかけてもコミュニケーションが取りづらくなり、どう接するのが正解かも分からなくなっていたというのもある。そして、もし認知症がこれ以上悪化して、私や家族のことまで忘れてしまっていたらどうしようと考えて、少し不安になっていった。そのため、遊びに行ったときの挨拶も気怠げになっていった。

しかし、そんな考えを変える出来事が起きた。私の祖母であり、すみこおばあちゃんの娘が亡くなったとき、家族がすみこおばあちゃんにそのことを知らせるか悩んでいた。もしかしたら知らせない方がよいのではないかと、とも話していた。それでも、棺の中をすみこおばあちゃんに見せることにした。すると、棺を叩きながら「バカ！」と叫んで泣いたのだ。私は今まで、すみこおばあちゃんは認知症になってしまったから周りのことも理解できなくなっているのだと思っていた。しかし、ちゃんと理解していたんだと実感させられた。そんなす

みこおばあちゃんの姿に胸を締めつけられて、私も周りに居た家族もつられて泣いてしまった。

このまま話しかけないままでは駄目だ、と思い、私はこれまで以上に話しかけることにした。体調が悪そうだったら「大丈夫？」と声をかけたりして、なるべくコミュニケーションをとろうとした。また、家族が忙しそうなききはなるべくすみこおばあちゃんのそばにいることにした。

そんなある日、叔父から父に連絡があったらしく、電話で話し込んでいた。そして、こう父から告げられた。「すみこおばあちゃんの呼吸が止まったって。」

衝撃だった。この前まで元気にしていたのに、亡くなっってしまったらどうしよう、私に出来ることは何かあったつけ、など色々な不安と恐怖が入り混じり、ほぼパニック状態だった。

そして、その日九十九歳で亡くなってしまった。

その後、様々な後悔となんとも言えない虚無感に襲われた。どうしてもっと遊びに行かなかったのだろう、どうしてもっと話しかけなかったのだろう。私の祖母が亡くなったときにも同じことを考えて、次こそは、と思っていたのに。そんな思いがぐるぐると頭の中を回り続けていた。

私は、「もう高齢者だから」「認知症だから」「どうせ

話しても伝わらない」と自分の勝手な先入観にとらわれていた。そのせいで、結局なにも出来ずに後になって後悔した。

私だけではなく、世の中の誰もが先入観にとらわれていると思う。「男だから」「女だから」「子供だから」「大人だから」と自分の思い込みを人に押し付けて、話し合ってもせず、自分の考えだけを貫いているのではないだろうか。しかしそれをやめることができれば、お互いを理解し合えて、共に新たな一歩を踏み出すことが出来るはずだ。そして、先入観にとらわれない人が増えて、その人達が後悔しないような世界になるといいなと思う。



奨励賞

威風堂々と

小平市立小平第三中学校 一年

椎川 煌 大

私は堂々と人前に出られますし、堂々と話します。上手く伝わらない時は、手を変えて伝わるように努力します。おしゃれも好きですし、人からかっこいいと褒められるとまた努力をしようと思います。皆から受け入れられることが何より嬉しいのです。

実は私は色々な病気を持って生まれてきました。今まで十二回、お腹や顔を手術してきました。これからも何回かは手術が続く予定です。手術の数だけ、傷跡も残ります。私のお腹は命がけの病気でし、命がけの手術もいくつか経験しました。今では体はすっかり元気ですが、その傷は少し引きつれています。その傷すら、勲章のようでかっこいいと自分で思うのです。プールの時には私の傷跡が名実共に、白日の元に晒されます。つい先日、仲のいい友人から「中二病みたいだな」と言われ、それすら「そうだろう、かっこいいだろう」と嬉しく

なりました。命を賭けた戦いに見事勝利した、ヒーローの傷跡のようでとてかっこいいのです！

そんな私にも、ひどい言葉を投げかけられ、傷ついたり過去があります。私の顔の病気は口唇口蓋裂。生まれつき口周辺の組織がつながらないで生まれてくる病気です。日本には五百〜六百人に一人ほど生まれる病気なので、知ってる人は多いと思います。今の日本の医療では、大人になる頃にはきれいに治すことができるそうです。それでも傷跡は多少残るので、昔は差別がひどかったそうです。それと私は血が止まりにくい病気がある為、いくつかの手術がうまくいきませんでした。特に喉の奥の閉鎖の手術は難しく、今でも発音に問題が残っています。リハビリは頑張っていますが、どうしても「カ行」が苦手なのです。

小学生の頃、相手に伝わらない事がもどかしく、つい大きい声になったり、どうにか伝えようとしてしつこくなってしまうことがあります。相手も不快に思ったのでしょう。「バケモノ」「気持ち悪い」時には「死ね」という言葉を私に投げつけ、その後いじめのようなことが続きました。私はひどく傷つき学校に行くのがつらくなり、時には家族に「死んだ方がいいのかな」と打ち明けたこともありました。幸いにして仲のいい友人や吹奏楽部の皆に助けられ、楽しく小学校生活を終われたと思

います。しかし、ひどい言葉はなかなか抜けない棘のように、私の心に刺さったままです。

ひどい言葉は問題外ですが、「気持ち悪い」という感情は人それぞれだから仕方がないように思います。虫が苦手、動物が苦手、集合体が苦手、人それぞれ色々な気持ち悪いという感情があります。私の顔や声を聴いて「気持ち悪い」と感じてしまう人がいることも、残念ながら当然のことのように思います。でもそれは見た目のことなので努力でカバーできるものだと考えました。私はなるべく表情、特に笑顔を豊かにして、傷跡のある顔から感情表現が豊かな人になりたいと思います。そうすればきっと私の顔に苦手意識のある人も、少し受け入れてもらえるんじゃないかと考えるのです。それと同時に強く思うのは、「人を傷付ける言葉は絶対に使わない」「色んなマイノリティを受け入れ、誰もが堂々と暮らせる社会を作る」ということを率先して行動していこうということです。

その後、中学校生活は引越しによる新天地で始まりました。私は友人ができるか、皆から受け入れてもらえるかとても不安でした。入学前に家族と共に先生方に相談し、クラスメイトと部活動では、初めに私の病気について話す事にしました。初対面の人前で病気を話すのはとても勇気が要りましたが、皆が真摯に受け止め

てくれていることを強く感じました。早く皆と仲良くなりたいくて空回ることもあったと思いますが、沢山の友達ができ、吹奏楽部の先輩や友達も優しく頼もしく受け入れてくれました。信じられないくらい幸せな中学校生活が始まりました。新天地の皆に受け入れてもらったのです！私の人生はまだまだ始まったばかりですが、小さな成功体験を積み重ねて、より良い社会になるよう少しずつ頑張っていこうと思います。昨今、様々な差別がびこり、ひどい言葉が安易に発信され、私はとても胸が苦しくなります。これ以上、抜けない棘が心に刺さることのない社会になって欲しいです。私がこの地に受け入れてもらえるように、この社会が様々なマイノリティを許容できるように豊かになればいいと思います。

誰もが自分らしく堂々としていていいのです。



奨励賞

いじめと傍観

東村山市立東村山第五中学校 二年

渡邊 世唯

「見て見ぬふりもいじめと同じ。」

いじめ防止を訴えるポスターがよく見るキャッチコピーだ。私はいつもそのようなポスターが目に残る。

いじめ防止のポスターを見るたび、私は心の中で自分に問うのだ。「傍観」ってなんだろう。どこからが「いじめ」でどこからが「傍観」なのだろうか。私は、「傍観」をしていなかったか。そして、どれだけ数の人がいじめを真剣に考えたことがあるのだろうか。

私が小学校三、四年生あたりのころのことだった。私の親友はいじめられていた。そのいじめは、クラスの半分くらいがしていたのではないだろうか。直接いじめをしない子たちも、いじめを知っているながらも何もなかった。いや、できなかった。最初は少し悪口を言ったりしていたクラスメイトたちは、だんだんともっとひどいいじめをするようになっていった。仲間外れにした

り、わざと机にぶつかったり、物をかくしたりしたこともあった。学級での活動で、何か失敗があれば、親友一人だけが責められた。そんな日が続きいつのまにか親友は、あまり学校に来なくなっていた。それを喜ぶいじめっ子たちを見て精一杯嫌そうな顔をしてみたけれど、それ以外私にできることはなかった。

本当は止めたかった。やめなよ、とたった一言言えたらどんなに良かっただろう。親友を傷つけるなんて、心の中では何度も怒った。言いたいことは頭の中にあふれているのに、それを口に出すことはできなかった。

だからこそ苦しかった。本当はやめな言って言いたいのにどうして言えないんだろうと何度も考えた。それと同時に、私も「傍観」しているのではないかと、クラスメイトたちと同じことをしているのではないかとずっと考えていた。私にできることは親友のそばにいて、ただそれだけだった。親友が学校に来れば、ずっと一緒にいた。少しでも親友の力になりたかった。そうやって親友を支えようとしながらも、よく考えていた。いじめを止めることもせず、ただ近くにいるだけの私に、なんの力があるというんだろうか。私は親友の力になれているのだろうか。と。

それでも親友は、私の前ではいつも笑顔だった。私といるときだけでも笑顔になってくれることに安心した。

親友も私のことを「親友」だと言ってくれてうれしかった。

それなのに、心のどこかで、何もできないことがずっと引っかかっていた。自分も傍観しているのではないかとまで考えていた。

でも、学年が上がるにつれ、私もだんだんと思っていたことを口に出せるようになっていた。親友のために怒れるようになった。すぐ戻ってくるけれど、少しの間でも、親友といじめっ子を離すことができるようになっていた。それでもいじめは何も変わらなくて、もどかしかったし悔しかった。それでも一つ一つ伝え続け、六年生になるころには、いじめはなくなっていた。

いじめがなくなっただけでなく、六年生の終わりの頃。私たちは「人権」について下級生に発表しに行くという授業があった。グループにわかれ、それぞれ好きな方法で資料を作った。

私のグループは、かわいいキャラクターで低学年の子たちも読みやすい紙しばいを作った。一方、親友のグループが作っていたのは親友の実体験を描いた紙しばいだった。ついに発表は、もうすぐに迫っていた。

一度だけ、親友の紙しばいのストーリーを読ませてもらったことがある。紙しばいには私をモチーフにしたキャラがあり、そのキャラは主人公の親友だった。その

中で、一つ心に残った場面がある。

「学校に行くのは嫌だけど、学校には親友がいる。その子に会うためだけに学校に行っていた。」
そうかいてあった。その言葉が、ただひたすらにうれしかった。

いじめは見ていて本当に嫌だったけれど、何もできなかった最初のころの私。そのときの私はいわゆる「傍観」だったのではないかと今でもときどき考える。それでも、ほんの少し勇気を出すことで、親友を少しでも助けられてよかった。心からそう思った。

今もきつと、このような状況にある人がいるのだろう。そしてその数はきつと、決して少なくない。

何もできなくてもそばに居ること。いじめにあっている子の味方であり続けること。そんな小さな勇気の積み重ねが、いずれ大きな力になると私は思う。

ほんの小さなことでもいい。そのような人が増えることで救われる人がきつといる。

私は、いじめが少しでも少なくなることを、そして、小さな勇気を出すことのできる人が増えていくことを、心から願っている。

奨 励 賞

障がいがある人の人権について

西東京市立田無第一中学校 一年

西谷 結人

今回、人権についての作文を書くに当たって、障がいのある人をテーマにしたのには理由があります。僕の四歳の弟は決して軽くはない程度の知的障害と自閉症です。まだ話すことも、言葉の意味を理解することも出来ません。身近に障がいをもつ家族がいるからこそ、このテーマで書こうと決めました。

前提として、日本には障害者基本法という法律があり、そのなかで差別をしてはいけないと決められています。行政機関や民間事業者だけではなく、それは個人でも守らなければいけないことです。しかし、現状では差別がない社会とは言えない現状であると僕は考えています。

二〇一六年に神奈川県津久井やまゆり園で起きた事件を知っている人も多いと思います。この事件では元職員だった犯人がこの知的障害者施設に入所していた十九

人を刺殺し、入所者、職員合わせて二十六人に重軽傷を負わせています。犯人の動機としては、重度の障がい者は社会の負担であり、また、意思の疎通ができない障がい者は人であって人ではないから殺した方が社会のためになる、とのことでした。僕自身としては理解できない犯行動機ですが、当時はインターネット上などで賛同する人も珍しくなかったようです。

なぜ犯人はこのような思想をもったのか、なぜ賛同する人が少なくはなかったのかを僕は自分なりに考えてみました。やはり根底にあるのは健常者からの差別と、障がい者の家族を悩ませます。なぜ差別をされるのか。意思の疎通ができず、何を考えているか分からないから不気味、怖い、気持ち悪いと考える人が多いのではないかと思います。行動が読めない人に対しての恐怖心が差別に繋がります。家族は差別されることで障がい者と一緒の外出に対してマイナスな感情になるでしょう。また、やまゆり園のような入所施設は絶対数の少なさから入所できるまでかなりの年数を待たなければならぬとききます。それにより家族が介護離職をするようになったという話を以前テレビで観たことがあります。つまり、家族であっても心は疲弊するのです。

この現状を解決するには障がいについて多くの人が理解し、学ぶ機会をつくることで障がい者の人権を守るこ

とが大切だと思います。障がいのある方は特別支援学校や、放課後等児童デイサービス、作業所などある程度みんな同じ進路をすすみ、中には小さい頃から健常者との関わりが少ない人が多いのも事実です。もちろんできることが違ってくるし、個々にあった支援が必要なので仕方がないことですが、そういった住み分けも障がいについて理解が進まない原因なのかなと思っています。しかし、学校の授業の中で障がいについてしっかりと学ぶ機会をもち、知識や理解を得ることができれば、例えば外で大きな声を出している人や独り言を言っている障がい者の方を見かけた時に、今はきつと自分の世界に入っているんだな、とか、何か困ったことや、自分のなかのルールとは違ったことが起きて気持ちが悪くなるかな、とか、何か困ったことが起きれば、わからないから怖いか？ と考えることができれば、わからないから怖いといった差別の気持ちも少なくなるのではないかと思っています。また、そのようにして障がいについて学ぶ機会が増えれば、障がい者福祉に興味を持つ人も増えて、福祉の道を選ぶ人も増え、受け入れ先の拡充にも繋がったり、また、いまはない新しいサービスが生み出される可能性もあります。

わからないから怖い、気持ち悪いと悪意のある視線や言葉を投げつけるのではなく、歩み寄ることが差別の気持ちではなく、障がい者の権利条約や、障害者基本法で

定められているように障がいがある人へのあらゆる差別をなくし、社会参加を促進し、教育や労働などに関する権利を保障し、すべての国民が障がいの有無によって分け隔てられることなく、相互に人格と個性を尊重しながら共生できる社会になるといいなと思っています。

最後に僕自身も弟が生まれるまでは障がいがある方に対して何も知らずに偏見をもっていました。今では他の子よりも発達がゆっくりでできることが少ないけど、確実にできることや表現が増えていった弟がかわいくて大切に仕方ないです。きっとほかの障がい者の家族をもつ人たちにとっても、大切な家族であることは間違いないと思います。だからこそ、僕自身も学んでいきたいし、周りにも学びや理解が広まることを心から願っています。



<p style="text-align: center;">奨 励 賞</p>
--

祖父母が教えてくれたこと

西東京市立田無第二中学校 二年

若^{わか}杉^{すぎ}紗^さ英^え

私は海外に行った事はありません。ですが私は英語が話せます。それは、周りには色々な国の人がいる環境で育ったからです。英語を教えてくれた先生はスリランカと日本のハーフやフィリピン人、友達にはオーストラリア人やカナダ人の子もいます。私はこんな環境で育った為、他の国の人に対して小さい頃から差別意識がありません。

しかし成長するにつれて、世の中には人種差別をしている人がいることを知りました。知ってはいたものの、どこか遠い話に感じていました。実際に同年代の子が差別で苦しんでいるのを、高円宮杯スピーチコンテストに参加した時に、一人の参加者のスピーチで知りました。そのスピーチを聞いて、自分とは違う人を否定や差別をせず、違いを受け入れれば、世界から差別がなくなると思いました。

どうして私がある様な環境で過ごせたのかと言うと、祖父母の考え方があると気づきました。そしてその考えを母が受け継ぎ、私に伝わったのだと思います。

そんな祖母が癌になり闘病し亡くなるまで、大変お世話になった看護師さんがいました。

今年のお盆にその方がお線香をあげに来てくれた時に、私も祖父の家に泊まっていました。祖母との思い出話に花が咲き、話をしていくうちに、なんとその方はベトナムからの難民だったと話してくれました。流暢な日本語で、祖母に処置を下さる姿は、日本人にしか見えなかつたのです。祖父母や母がその方がベトナム人だとは一言も言わなかつたので、全く気がつきませんでした。その方は四人兄弟の長女だそうです。その方のお父さんは、一緒に日本へ行く仲間との最終の打ち合わせの帰り道で、バイクで事故に遭い、命を落としたそうです。悲しみに暮れている間もなく、お母さんが子供達を連れて日本へ出発し、広島へ辿り着いたのです。

彼らはクリスマスチャンで、教会のついで、母の住む街へ引っ越してきました。生活が落ち着いてきたある日の事、彼らが住んでいたアパートが貰い火で全焼してしまいました。その為、私の母の家の隣に引っ越しをする事になりました。彼らのお母さんは毎日遅くまで働いていたそうです。子供だけで家で過ごすのを祖母が心配し、

家に招くようになりました。夏休みには、皆で花火をし、映画に行ったり、一緒に過ごすようになりました。当時まだ帰化をしてなかったたので、差別やいじめを受けた事もあったそうです。その家族の長男が難民というところで、職場が見つからなかった時は、祖父の会社に就職させました。祖父の事務所で、良く会う彼もベトナム人だったのです。

また祖母は闘病中、腹水が溜まり、癌治療とは別の病院で、腹水を抜く為の入院をする事になりました。たまたま紹介された病院で看護師になった長女と再会を果たしたので。当時はコロナ禍で、検査入院以外の初めての入院でした。病室に家族も付き添えず、大変心細かったと思います。ですが、彼女がお休みの日にも関わらず、祖母に付き添ってくれたのです。ついに抗がん剤治療もできなくなり、最後は彼女のいる病院の個室で過ごしました。痰が絡んだ祖母にチューブを入れて吸引する時に、彼女が必死に処置をしてきている姿が、とても印象的でした。私も側で手を握り、声を必死に掛けました。処置が終わった時にお礼を言うと、「あなたのおばあちゃんには、大変お世話になったのよ。私が映画に初めて行ったのは、私があなたくらいの人に、おばあちゃんが連れて行ってくれたの。今でもとても感謝してるわ。」とおっしゃったのを良く覚えてます。その本当

の意味を三年たった今、私は知ったのです。きっと差別や偏見をもった人達による、嫌な思い出も沢山あった事でしょう。そんな中、優しく接してくれた祖母にずっと感謝していたのです。祖母の抗がん剤治療の日は、長男が仕事を頑張ってくれて、祖父は仕事を休み、必ず付き添いました。祖父母が人種に関係なく人を助けていた恩が、忘れた頃に返ってきたのだと思いました。

この様な事から、私は国籍や人種に関係なく、他者との違いを受け入れ、祖父母の様に人に愛をもって優しく親切にしたいと思う様になりました。中学生の私には差別している人を変えることはできませんが、もし人種差別されている人がいたら、その人に寄り添いたいです。祖父母の様な心の持ち主が増えたら、世界は少し優しくなると思います。今まで人種差別に意識を向けていませんでしたが、私は祖父母の意思を受け継ぎ、広めていこうと心に決めました。まず、英語を話せる子供達が増えたら、言葉の壁がなくなり、差別も減らせるのではないかと思います。英語を小さな子供に教えるボランティアを始めました。

いつか、人種に左右される事なく、人と人が優しい心で繋がり、それが当たり前の世の中になる事を、私は切に願います。

奨励賞

相手と自分の理解

西東京市立ひばりが丘中学校

（非公表）

糖尿病という病気を多くの人が聞いたことがあると思います。糖尿病は、インスリンという膵臓から出るホルモンの一種が十分に働かないために、血液中を流れるブドウ糖という糖が増えてしまう病気です。しかし、多くの人は糖尿病に四種類もあることを知りません。私は、その四種類の中の一つの一型糖尿病です。一型糖尿病とは、インスリンを出す細胞が壊される病気であり、生活習慣病ではありません。

私は、七ヶ月の時に一型糖尿病を発症しました。今では、生活の一部ともども思えますが、一型糖尿病は起伏が激しいので学校にお菓子を持つていく必要があります。それを聞いた人があると言葉は「いいな」です。それを聞くと残念であり、あきれます。それを持つている事情も知らない人がなぜそんなことを言えるのかと思うのです。

私が、小学二年生の頃に仲の良かった友達に病気のことを話しました。すると、その友達からかえってきた言葉は、「そうなんだ。でもいいじゃん。お菓子持つてくれるんだから。好きな時に食べれるし。」でした。私は、「好きな時に食べる」という言葉を聞いて衝撃を受けました。何よりもそんなふうに思う人がいることに驚いたのです。

それから数日経ち、私はよく病気のことを考えてみることにしました。この病気があることで何かできなくなる可能性があるのかや危険性について考え、他の病気について調べたこともありました。その結果、私が思ったのは、まだ恵まれているということです。私は、ある意味障害を抱えているのかもしれないです。でも、私より苦しい思いをしている人はたくさんいると他の病気を調べて思ったからです。私にとって病気は生活であり、お菓子は薬です。また、この二つは宝物のように大切に必要不可欠なものです。

私は今もこの病気について友達に話すことを悩みます。全員が完全に理解してくれるとは思っていませんが、やはり「いいな」と言う人がいます。それでも私は、一人でも少しでも多く理解してもらえるように伝えたいです。

私は、「いいな」や「好きなときに食べられる」と言

わかれてこの病気について考えるようになりました。最初は、「病気じゃなかったら良かったのに」と思うことも多くありました。しかし、今では私の大切なものです。なぜなら、同じ病気で知り合った友達や病気になったからこそ分かったことがあるからです。

私は、病気のことを考えるときに障害者とは何かを考え調べてみました。障害者とは、長期的な身体的、精神的にうまく働かないために不便なことや困ることがある人のことです。皆さんにも長期間にわたる悩みがあったことがあるのではないのでしょうか。私は、全員がどこかに障害を抱えていると思っています。その中でも一般的に障害者と呼ばれる方は、病気に陥ってしまったたりして一人または自力で生活ができない人のことです。確かに誰もが病気を持っているわけではありません。しかし、一人で一生を生きていくのは不可能ではないでしょうか。誰もが他の人との支え合い、助け合いがあつてこそ生きていけると思います。

私は、人の障害をできるだけ理解し、支えられる人間になりたいです。人は誰でも抱えているものがあります。悩み、心の傷、病気などその抱えているものは人それぞれです。それらの人が抱えている何かを他の人が勝手に噂をしたり、本人が話した言葉の一言に過剰に反応し、抱えているものを探すことはその人のプレッシャー

になったり、追い込むことに繋がると思います。でも、相手のことを知りたいのなら、障害となるものを自ら聞くのではなく、相手が信頼して「この人なら言ってもいいな」と思つて自分の抱えている障害を伝えてくれるような行動をしたり、教えてもらったことが衝撃的で他の人に言いたくなくても固定概念にとられず、言わないでおくことが大切だと思います。また、伝えたいと思つている本人も、相手に理解してもらえような工夫や相手に伝えて正しい意味で受け入れてくれるかを考えることが自分を知ってもらえる、更に仲良くするきっかけになるのではないのでしょうか。

自分について考えることは、周りの人を考えることにも繋がります。大きな一歩になります。私は、やっと踏み出すことができました。皆さんが大きな一歩を踏み出すことを願っています。



奨 励 賞

私のお父さん

あきる野市立増戸中学校 二年

渡邊桜子

私の父は車椅子で生活しています。私が物心つく前の勤め先で不慮の事故に遭い左脚の腿半分から下を失った為です。まだ幼かった当時の私には、状況を理解することができない訳もなく、ただ「元氣のないお父さん」という認識のみでした。もちろん、父の左脚については何の違和感も感じずに生活していたので、「車椅子」や「松葉杖」、「義足」という言葉に対しても「日常的に使う物」としてしか考えていませんでした。

しかし暫くし私が四歳の時、父と母は離婚しました。離婚する前から二人の喧嘩は段々と増え、ついに私は口論をしている二人の間に入り「お母さんをいじめないで。」そう父に向かって言いました。父だけが悪いと決めつけて、何も疑うことなく真っ先に言いました。その時の父の顔を今でもよく覚えています。私や母には到底理解できない苦しみや葛藤が、それはきつと脚を失った

ことに深く関係しているのだと気付いたのはそれから数年後のことです。

離婚した後も、父とはよく会っていました。ショッピングセンターや遊園地など、父は色々な場所に連れて行ってくれたので、楽しい思い出は沢山あります。ですがそれと同じくらい嫌な思い出もあります。まず前提として、父は移動するときに「車椅子」か「義足」を使います。そのため健常者に比べると、移動のしやすさや範囲、自力で行動できる場所などに限りがあります。それだけでも悩みはあるはずなのに、「車椅子」だから、「義足」を履いているから、ただそれだけで差別されることも多くあります。圧をかけてくる人、可哀想だと言ってくる人、父の左脚をじっと見てくる人、わざとらしく避ける人、笑って馬鹿にする人。いつしか父は、「元氣のないお父さん」から「横柄な態度をとるお父さん」に変わってしまいました。人が沢山いて通りづらい道があれば何も言わず強引に通ろうとしたり、誰に対しても喧嘩腰だったりなど、とにかく横柄で人嫌いのように見えませんでした。しかし私が中学生になり、勉強や部活動で忙しくなると、自然と父と出かけることも減りました。そんな私も、やはり父のことは好きなので、水族館に誘ったことがありました。幸い、その日は親切な人が多く、父もどこか嬉しそうに見えました。帰りの車内はととても静か

で、私はどうとうとしながらその日一日を思い返していました。折角水族館へ行ったのに、一番に考えたのは嫌な思いをすることが少なくなくて良かったということでした。こんなことを考えてしまう自分に嫌気が差しましたが、それでも楽しめたことに変わりはありませんだったので、複雑な気持ちでした。そのとき、父は笑顔で「今日は親切な人が多くて良かったな。」と言いました。私は、いつか母から聞いた「お父さんは人と関わるのが大好きな人なの。ただ少し、不器用だから勘違いされることが多いんだよね。」という言葉と、あの日見た忘れることのできない父の顔が頭に浮かびました。父が変わってしまったのは、「車椅子」や「義足」を使うことよりも「見た目だけで判断し本人を無意識に傷つけている人々」の影響が大きいのだと思いました。「親切な人が多くて良かった。」という父の言葉に、私は「そうだね。」としか返せませんでした。それでも、私達にとつては充分でした。

今の時代に重要なのは、「誰であつても傷つけない」ことだと思います。理解しなくていいから、攻撃もしないで欲しいのです。自分には理解できないと思つたらそれでいいと思うかは人それぞれです。その人それぞれをどのように受け取り行動していくかが、今の時代を生きる私達にとつての課題なのではないでしょうか。



令和六年度 全国中学生人権作文コンテスト 東京都大会入賞作品

◆最優秀賞（東京法務局長賞）

子どもの権利

荒川区立第三中学校

三年 宇田華都

◆最優秀賞（東京都人権擁護委員連合会会長賞）

「書けない」を抱えて生きる

国立市立国立第一中学校

二年 中山有哉

◆最優秀賞（東京新聞賞）

偏見にとらわれない事を大切に

中野区立第二中学校

二年（非公表）

◆特別優秀賞（東京都教育委員会賞）

知らないことは罪

東村山市立東村山第四中学校

二年 小澤明莉

◆優秀賞

いじめ—人権は永遠につなげるもの—

（非公表）

（非公表）

レオタードは、誰が決めるの？

北区立王子桜中学校

一年 小瀬なつみ

支える人を支えられる社会に

品川区立浜川中学校

七年 永島茉桜

共に生きる社会へ

渋谷区立原宿外苑中学校

三年 目黒龍一郎

「普通」の子

八丈町立大賀郷中学校

三年 浅沼由珠

「平等なもの」

町田市立鶴川第二中学校

三年 小野颯士

発達障害の友達から教わったこと

西東京市立ひばりが丘中学校

二年 岡田滯来

広島が教えてくれたこと。

羽村市立羽村第三中学校

三年 橋本薫

障害者の可能性

あきる野市立西中学校

一年 葛野多緒

◆奨励賞

兄との生活を通じて
温かい心の交流
経験と願い、そして誓い
いじめ
人生を変えた戦争
私を感じた同調圧力
人と言葉
今を変えられる勇氣
『無意識』を『意識する』
目に見える障害と見えない障害
「たった一言」で変わる人生
自分らしくあるために
知ろうとする気持ち
情報と繋がりで学びの機会を守る
私の生涯
笑顔のバトン
後悔からの一步
威風堂々と
いじめと傍観
障がいがある人の人権について
祖父母が教えてくれたこと
相手と自分の理解
私のお父さん

新宿区立新宿西戸山中学校	二年	清水 菜津子
練馬区立大泉第二中学校	二年	佐久間 美希
江東区立深川第八中学校	三年	小林 蒼 欧
江戸川区立松江第五中学校	一年	(非公表)
新島村立新島中学校	一年	東野 結美子
立川市立立川第三中学校	一年	(非公表)
立川市立立川第九中学校	一年	池 亀 沙 羅
八王子市立松が谷中学校	三年	(非公表)
八王子市立第一中学校	一年	相 吉 こころ
八王子市立四谷中学校	一年	城 川 悠 成
町田市立鶴川中学校	二年	(非公表)
稲城市立稲城第三中学校	一年	(非公表)
多摩市立和田中学校	二年	佐 宗 泰 知
府中市立府中第一中学校	二年	中 西 隼 介
府中市立府中第二中学校	三年	(非公表)
国分寺市立第二中学校	三年	芳 根 春 歌
調布市立第七中学校	二年	武 田 花
小平市立小平第三中学校	一年	椎 川 煌 大
東村山市立東村山第五中学校	二年	渡 邊 世 唯
西東京市立田無第一中学校	一年	西 谷 結 人
西東京市立田無第二中学校	二年	若 杉 紗 英
西東京市立ひばりが丘中学校	二年	(非公表)
あきる野市立増戸中学校	二年	渡 邊 桜 子

◆ 作文委員会賞

心でつながる	中央区立晴海中学校	二年	小林 莉緒
「フィルター」不要	中央区立晴海中学校	二年 (非公表)	
良い未来への第一歩となるように	中央区立日本橋中学校	一年	伊藤 椿
小さな勇氣	港区立高松中学校	二年	大塚 安希子
「普通の家族」って何ですか？	新宿区立四谷中学校	二年	瀬川 結咲
可哀想の先	新宿区立新宿西戸山中学校	二年	清水 愛友花
良いクラスとは何か？	台東区立柏葉中学校	二年	小澤 雅
これはなんのため？	台東区立上野中学校	二年	朝日 麻帆
カテゴリによる差別	文京区立文林中学校	二年	木村 夏央
知る、学ぶことが人権を守る第一歩	北区立堀船中学校	三年	小林 紗和
ニーハオ	大田区立馬込東中学校	二年	欧 彙嘉
印象に残った高校野球	サレジアン国際学園田谷中学高等学校(世田谷区)	二年	林 慶
エレベーターと障害	渋谷区立上原中学校	二年	鈴木 紗衣
私の居場所	渋谷区立鉢山中学校	三年	永田 理科
虹色の世界	渋谷区立鉢山中学校	三年	立澤 仁
無意識な「差別」について	目黒区立東山中学校	二年	田中 望琴
だれもが「ふつう」	中野区立北中野中学校	二年	松田 宙樹
百歳が楽しみな社会	中野区立中野東中学校	二年	須藤 柑菜

私にできる小さな一歩	東京都立富士高等学校附属中学校(中野区)	二年	星山 歩未
理解	杉並区立阿佐ヶ谷中学校	一年 (非公表)	
個性あふれる世の中へ	杉並区立向陽中学校	一年 (非公表)	
冷たい視線と温かい手	杉並区立向陽中学校	一年	松村 隼輝
いつでも「自分らしく」	杉並区立松ノ木中学校	二年	ウイリアムス都美
「助け合う」の偉大さを知る	城西大学附属城西中学校(豊島区)	三年	平林 春翔
勇敢な彼	十文字中学校(豊島区)	三年	鈴木 璃子
皆によりそえる社会	板橋区立西台中学校	八年	市川 紫苑
拉致	板橋区立桜川中学校	二年	水島 凜子
この人なら大丈夫	板橋区立高島第二中学校	三年	清野 るり
私に本当にやりたいこと	練馬区立大泉第二中学校	二年	宇都宮 恵麻
「普通」の基準	練馬区立立竹の塚中学校	三年	徳元 美桃花
言葉は刃物	墨田区立堅川中学校	二年 (非公表)	
言葉の重み	墨田区立吾嬬第二中学校	三年	李 敏菁
二つ目の名前	葛飾区立中川中学校	二年	藤田 優莉亜
そして、私たちへ	江戸川区立松江第五中学校	一年	高畑 颯介
優しい外国人	江戸川区立瑞江第三中学校	三年	佐藤 香乃
区別と差別	大島町立第三中学校	三年	木村 厚太
「みんなが過ごしやすい世の中に」	新島村立式根島中学校	三年	山田 栞愛
一人の人として	神津島村立神津中学校	二年	石田 莉音
一人一人の個性を大切に			

入賞作品一覧

言い放った言葉の重み	三宅村立三宅中学校	一年（非公表）
人権について	利島村立利島小中学校	一年 内藤 大新
第一歩	小笠原村立母島中学校	三年 安居 右恭
男だから・女だから	小笠原村立小笠原中学校	二年 片山 実里
「僕」と「私」を守る人	立川市立立川第二中学校	二年 田中 汐莉
命を大切にしてほしい	立川市立立川第七中学校	二年 小原 奏空
「当たり前」を問い直す	昭島市立拝島中学校	二年 古川 直
あたり前じゃない	昭島市立拝島中学校	二年 自見 武直
男女差別について	東大和市立第二中学校	二年 荻部 遥乃
言葉に責任を	東大和市立第三中学校	二年 奥 佑樹
偏見と差別（心を見つめて）	東大和市立第四中学校	一年 満留 未希
お互いの違いを否定せず、尊重しあえる社会へ	武蔵村山市立第五中学校	二年 葉袋 千佳
二人の友達	武蔵村山市立第五中学校	二年 古谷 望愛
なりたいたい自分になるために	八王子市立第五中学校	一年 峰岸 那心
人生の大切さ	八王子市立第五中学校	一年 三沢 志乃香
言葉の責任	八王子市立横川中学校	三年 小林 夕夏
難聴の私が思うこと	日野市立大坂上中学校	三年 渡邊 千椰
戦争と人権	日野市立大坂上中学校	三年 久世 奏子
言葉の持つ影響力	日野市立七生中学校	三年 木本 将暉
人権の本当の意味（非公表）	町田市立南中学校	二年 大徳 祐輔
障害者の思い	町田市立南中学校	二年 鈴木 康祐
優しい社会になることを願って	町田市立立南中学校	二年 岡田 日央里
旧優生保護法	町田市立鶴川第二中学校	三年 岡田 日央里

小さな一歩が未来を変える	稲城市立稲城第三中学校	一年 小田 唯織
「権利」と「自由」の相違	稲城市立稲城第四中学校	二年 石田 有
平和につながる人権	多摩市立青陵中学校	一年 北岸 愛美
ごめんね、おじいちゃん。	多摩市立落合中学校	二年 松崎 結香
努力のマジック	府中市立府中第一中学校	二年（非公表）
制服	府中市立府中第二中学校	二年 石崎 杏
誰かを助けることが負担にならない社会	府中市立府中第三中学校	二年 北橋 由梨
医者でなくても、偉い人ではなくても人を救える	府中市立府中第八中学校	二年 三浦 眞子
「差別」を無くすために考えたこと	小金井市立南中学校	二年（非公表）
だれもが気軽に楽しめる環境作りを	小金井市立緑中学校	三年 川端 悠貴
障害のこえかた	国分寺市立第四中学校	三年 菊池 凛
誰もが自由に生きる（非公表）	東京都立武蔵高等学校附属中学校（武蔵野市）	二年（非公表）
画面の向こう側には	東京都立武蔵高等学校附属中学校（武蔵野市）	三年 高瀬 千愛
繰り返される差別の悲しさ	連雀学園三鷹市立第一中学校	一年 花岡 拓音
笑い声を最期まで	にしみたか学園三鷹市立第二中学校	二年 石田 藍李
差別の火種	三鷹中央学園三鷹市立第四中学校	二年 佐々木 杏菜
言葉に笑顔の味つけを!!	調布市立第五中学校	二年 松田 妙音

障害をもつても生きやすい世の中へ	調布市立第六中学校	二年	渡邊 僚哉
繰り返し返さない決意	調布市立神代中学校	二年	宮澤 泉
高齢者の人権について	狛江市立狛江第一中学校	二年	古谷 遼汰
きっかけ	小平市立小平第二中学校	二年	矢作 琉依
優先席の存在意義について	小平市立小平第四中学校	二年	黒澤 奏和
バリアフリーが当たり前の世の中へ	東村山市立東村山第二中学校	二年	神山 颯士
より良い社会のために。	清瀬市立清瀬第二中学校	三年	児玉 結音
「食料への権利」―パフエとササゲ―	東久留米市立東中学校	三年	小室 紗帆
「想像力」それだけで現状は変えられる	東久留米市立南中学校	二年	坂本 美羽
高齢者と共に生きる社会へ	東久留米市立南中学校	二年	小野寺 遥香
音なき世界で生きる力	西東京市立田無第四中学校	二年	遠藤 風菜
「自分らしく」生きる	青梅市立西中学校	三年	松田 さゆり
自分らしく生きる	(非公表)		(非公表)
誰とでも話す努力を	奥多摩町立奥多摩中学校	三年	山田 瑛文
一人称と個性	羽村市立羽村第二中学校	二年	矢部 季
高齢者の人権課題	瑞穂町立瑞穂中学校	三年	川口 和奏
優しさが足りない	福生市立福生第一中学校	二年	岩瀬 千愛
働きやすさで守る人権	あきる野市立御堂中学校	二年	竹内 美惺
大切な友達を苦しめた「いじめ」	檜原村立檜原中学校	一年	石渡 飛鳥
人間の権利	日の出町立大久野中学校	一年	宇野 将平

※作者の希望により、一部非公表とされている箇所があります。

令和6年度
全国中学生人権作文コンテスト東京都大会審査員

東京都教育庁指導部主任指導主事	小野 憲明
一般財団法人東京私立中学高等学校協会広報部副部长	加藤 晃孝
東京新聞編集局経済部生活班編集委員	鈴木久美子
東京都人権擁護委員連合会长	草薙 一郎
東京都人権擁護委員連合会副会长	宮本 道子
東京都人権擁護委員連合会子ども人権委員会委員長	野尻 信江
東京都人権擁護委員連合会男女共同参画社会推進委員会委員長	森井 良子
東京法務局人権擁護部長	玉井由紀江
東京都人権擁護委員連合会人権作文実行委員会委員長	松村由紀子

(敬称略)

無断転載を禁じます

※本作品集の作文を他の刊行物に掲載する場合には、原則、許可が必要となりますので、下記に御連絡ください。

〒160-0004
東京都新宿区四谷 1-6-1 四谷タワー 13 階
東京法務局人権擁護部
TEL. 0570 (011) 000

令和6年12月 発行

発行者 東京法務局人権擁護部
東京都人権擁護委員連合会
東京都新宿区四谷 1-6-1 四谷タワー 13 階
TEL 0570 (011) 000